

(3) 葉 坂 戸 の 内 遺 跡

調査要項

遺跡名：葉坂戸の内遺跡

遺跡記号：AU(宮城県遺跡地名表登載番号:08022)

遺跡所在地：宮城県柴田郡柴田町葉坂字戸の内

調査面積：約4,800m²(発掘面積1,053m²)

調査期間：昭和47年11月7日～昭和48年1月20日

調査員：宮城県教育序文化財保護 室佐々木安彦 遊佐二郎

目 次

I. 遺跡の位置と周辺の遺跡.....	63
1. 遺跡の位置と自然環境.....	63
2. 町内の遺跡.....	63
II. 調査の方法と経過.....	66
III. 調査の成果.....	69
1. 基本層位.....	69
2. 堅穴住居跡.....	71
3. 掘立柱建物跡.....	79
4. ピット群.....	82
5. 土壇.....	83
6. 焼土遺構.....	84
7. 焼面.....	85
8. 石組炉.....	86
9. 墓廣.....	87
10. 溝.....	87
11. 遺構以外の出土遺物.....	87
(1) 繩文土器.....	87
(2) 弥生土器.....	90
(3) 土師器.....	90
(4) 須恵器.....	92
(5) 土師質土器.....	96
(6) 陶磁器.....	96
(7) 泥面子.....	100
(8) 石器.....	100
(9) 有孔円盤.....	102
(10) 砕石.....	102
(11) 鉄製品.....	103
(12) 木製品.....	103
(13) 古錢.....	103
IV. 遺構・遺物に関する問題点.....	104

1. 出土土器	104
〔縄文土器〕	104
〔弥生土器〕	104
〔土師器・須恵器〕	104
〔土師質土器〕	106
〔中世陶器〕	106
2. 壁穴住居跡	107
3. その他の遺構	107
V まとめ	109

I. 遺跡の位置と周辺の遺跡

1. 遺跡の位置と自然環境

葉坂戸の内遺跡は柴田町櫻木の中心部から北西約4km、柴田郡柴田町葉坂字戸の内に位置する。

本遺跡のある柴田町を地形的にみると臨前丘陵に囲まれている。その北側に村田町と境を接する高館丘陵、翻則に角田市と接する角田丘陵がある。この間を奥羽山地から発した白石川が小河川を集め、東流している。また福島県から発した阿武隈川は北流し、櫻木の市街から南に約1kmのところで白石川と合流し、太平洋に向って東流している。阿武隈川および白石川両岸にある低地は櫻木低地と呼ばれ、高館丘陵の南端を刻んだ谷が埋積し、形成された盆地状低地である。

本遺跡は高館丘陵から南東方向嘉平地区に突出する標高100m前後的小起伏状丘陵がさらに樹枝状にわかれて、音見坂地区付近から南東方向にのびる小丘陵の先端部付近の南斜面に立地している。本遺跡の微地形を見ると小丘陵の裾部南斜面から小丘陵にそって東流する小河川によって形成された沖積地とにわかる。標高は約22m、現状は畑地と水田である。

2. 町内の遺跡

柴田町内の丘陵、丘陵斜面、低地には、現在99ヶ所の遺跡が確認されている。時代別にみると、次のような遺跡がみられる。

旧石器時代の遺跡はまだ発見されていない。

縄文時代の遺跡には、東北地方における縄文時代早期の標式遺跡として著名な松崎貝塚（別名櫻木貝塚）があり、昭和初年に東北大、山内清男氏、伊東信雄氏によって発掘調査が実施された。また上川名貝塚は東北学院大学、加藤孝氏によって調査が行なわれている。両貝塚とも縄文時代早期から前期初頭にかけて形成された貝塚であり、東北地右の考古学研究史上に重要な役割を果している。その他にも、金谷貝塚、中居貝塚、館前貝塚、深町貝塚がある。これらの貝塚は総称して櫻木貝塚群とも呼ばれている。この貝塚群は標高5~6mの小丘陵先端部に位置しており、当時の海岸線、自然的環境を推定できうる資料ともなっている。この他にも葉坂遺跡、倉元向遺跡、台遺跡、向畠遺跡、鹿野遺跡などがある。

弥生時代の遺跡には、上野遺跡、寺後遺跡・川名沢遺跡・赤柴遺跡などがあり、立地は丘陵斜面へと変わり、遺跡の数は減っている。

古墳時代の遺跡には西田遺跡・宮前遺跡・上名沢遺跡・川原遺跡・剣塚古墳・牛堂古墳・上



(国土地理院発行1/50,000「近畿」を複製) 第1図 萩坂戸の内遺跡と周辺の遺跡

路名	地名	種別	時代	人名	野原	庄稼	跡	中世
1 白田通	丘陵地	台合地	古・平安	51 痴野通	荒地	名合地	葛文(後・朝)	
2 長穴通	丘陵地	台合地	古・平安	52 田名古通	荒地	名合地	葛文(後・朝)・後云 古通・名合・平安	
3 川原通	自然地帯	台合地	古・平安	53 寺通	耕	反耕地	名合地	
4 鹿山通	丘陵地	古地名	桃文(中・後)	54 西船通	荒地	自然堤防	神	中世
5 十六作人宿古塚群	丘陵地	古地名	桃文(後)・平安	55 赤松通	耕	反耕地	名合地	桃文(後)・平安
6 丸柳堂後通	丘陵地	台合地	新・平安	56 下山通	耕	反耕地	名合地	桃文(後)
7 別坂古通	丘陵地	古地名	桃文(後)	57 仁田通	耕	反耕地	名合地	桃文(後)・平安
8 松崎通	丘陵地	台合地	桃文(早・中)	58 這ノ内通	荒地	名合地	新・平安	
9 鹿嶋瓦屋町	台地	台合地	桃文(中・後)	59 八幡通	耕	自然堤防	名合地	新・平安
10 露町通	丘陵地	台合地	桃文(中・後)	60 宮前通	耕	自然堤防	台合地	新・平安
11 黒坂通	丘陵地	台合地	桃文(中・後)・平安	61 小堀通	荒地	自然堤防	台合地	桃文(中・後)
12 中通	丘陵地	台合地	桃文(中・後)	62 神生通	耕	自然堤防	名合地	桃文(中・後)・平安
13 金谷通	丘陵地	台合地	桃文(後)・	63 飯食通	耕	丘陵地	名合地	新・平安
14 食谷通	丘陵地	台合地	桃文(中・後)	64 中内通	耕	反耕地	名合地	桃文
15 上川名木原通	丘陵地	台合地	桃文(中・後)	65 露町通	荒地	丘陵地	台合地	新・平安
16 西田通	丘陵地	台合地	新・平安	66 台通	耕	台合地	台合地	桃文(中・後)
17 原寺古河原伝福原	丘陵地	古地名	中世?	67 大坡通	河川敷	台合地	桃文(中・後)・平安	
18 反穴横穴古墳群	丘陵地	古地名	古(後)・平安	68 鳥崎通	古通	台合地	桃文・鳥崎・平安	
19 鶴見向通	丘陵地	台合地	桃文(中・後)	69 這ノ内通	台合地	台合地	桃文(中・後)	
20 離ノ下渡通	丘陵地	台合地	桃文・奈良・平安	70 佐藤町通	古谷地	台合地	台合地	桃文(中・後)
21 大沢通	丘陵地	台合地	新・平安	71 石坂古通	台合地	台合地	古澤(後)	
22 鹿坂戸の内渡通	丘陵地	台合地集落地	桃文(中・後)・平安	72 富田通	台地	台地	中世	
23 今坂通	丘陵地	台合地	新・平安	73 今田通	台地	台地	中世	
24 情代通	丘陵地	台合地	奈良・平安	74 鶴治内通	台地	台地	平安	
25 清坂通	丘陵地	台合地	桃文(中・後)	75 不動生通	耕	台合地	桃文(中・後)	
26 竹ノ内通	丘陵地	台合地	奈良・平安	76 上日月通	台地	台地	桃文(中・後)	
27 入間田風穴通	丘陵地	台合地	桃文・奈良・平安	77 芦火通	台地	台合地	台合地	
28 大堀通	丘陵地	台合地	桃文・奈良・平安	78 上名生道通	耕	河畔平野	台合地	源氏・平安・中世
29 鶴見通	丘陵地	台合地	桃文(後)	79 佐内通	耕	台地	台合地	桃文(中)
30 馬ノ瀬通	丘陵地	台合地	桃文・古墳	80 内海通	台地	台地	台合地	桃文(小)
31 萩坊通	丘陵地	台合地	古(後)	81 二合田通	耕	台地	台合地	平安
32 田乞通	丘陵地	台合地	桃文(中・後)	82 旗ヶ丘通	台地	台合地	桃文	
33 小折清内通	丘陵地	台合地	生産地(奈良・平安)	83 入郷通	耕	自然開拓	台合地	新・平安
34 鶴治櫻井通	丘陵地	台合地	生産地(奈良・平安)	84 船岡通	通	丘陵地	台合地	桃文・鶴治・古澤
35 鶴谷谷内通	丘陵地	台合地	生産地(奈良・平安)	85 谷山通	通	台地	台合地	桃文(中)
36 向日通	丘陵地	台合地	奈良・平安	86 上野古谷通	台地	台地	古谷(後)	
37 鶴見入鹿通	丘陵地	台合地	桃文(中・後)	87 鶴見通	通	丘陵地	台合地	桃文(小)
38 後藤通	丘陵地	台合地	桃文(中・後)・平安	88 久間通	通	久古通	台地	久良
39 鶴谷横穴古墳群	丘陵地	古(後)・而良	90 丸山通	通	丘陵地	台合地	中世	
40 豊岡通	丘陵地	台合地	中世	91 人田野平城跡	自然堤防	荒	中世	
41 鶴井横穴古墳群	丘陵地	台合地	新・平安	92 横堀通	耕	台地	台合地	
42 幸草古通	丘陵地	古地名	古(後)	93 鶴見山通	通	分離丘陵	城	中世
43 上平通	丘陵地	台合地	奈良・平安	94 鶴見山通	通	分離丘陵	城	中世
44 地蔵通	丘陵地	台合地	桃文・奈良・平安	95 今合横穴古墳群	丘陵地	桃文(後)	古墳(後)	
45 竹ノ内通	丘陵地	台合地	桃文	96 鶴島町社貝塚	丘陵頂	貝塚	桃文(中・前)	
46 白石川下流流域	河川敷	台合地	奈良・平安	97 河山通	通	自然中権	吉	吉
47 上賀通	丘陵地	台合地	生産地(奈良・平安)	98 大沼通	通	台地	大沼(後)	
48 寺入山通	丘陵地	台合地	古(後)・古(後)	99 四深通	通	台地	台合地	中世
49 新宿半通	丘陵地	台合地	奈良・平安	100 家通	通	台地	台合地	新・平安

野山古墳群（寺後古墳群）、円山古墳・炭穴横穴古墳群、森合横穴古墳群、船岡追横穴古墳群、十八津入横穴古墳群などがあり、立地は自然堤防などに広がる。

奈良・平安時代の遺跡には、集落跡の土平遺跡をはじめ入袋遺跡、沼ノ内A遺跡・大橋遺跡明神堂遺跡・北沼田遺跡・上野遺跡・地獄沢遺跡・竹ノ内遺跡などがある。丘陵・丘陵斜面・自然堤防と立地が移り、遺跡の数も多くなってきている。この時代になると生産遺跡である小和清水遺跡・鍛冶屋坂遺跡・風穴遺跡などの製鉄遺跡が小丘陵の谷間などに立地している。また兎田遺跡からは格子叩き目がつく平瓦破片が出土している。

中世～近世の遺跡には館山城跡・岩崎館跡・西館跡・小花館跡（入間田城跡）、富沢館跡・成田館跡・丸山館跡・蛇穴館跡・八幡館跡・御殿山館跡・四保館跡（船岡城跡）などの館跡がある。丘陵麓・丘陵・分離丘陵の自然地形を利用してつくられた館跡である。これらの館跡と一般の人々との係わり合いは不明点が多い。また寺後入遺跡は仏像断片が出土しているところから宗教遺跡と考えられている。

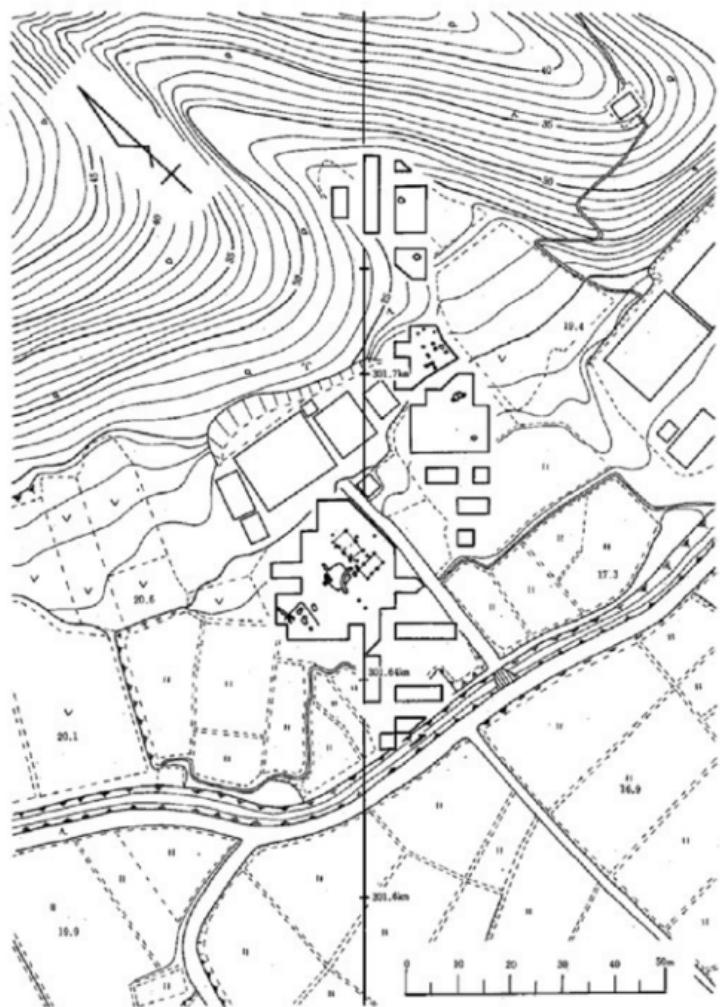
II. 調査の方法と経過

昭和46年度の分布調査によって土師器破片が数片、畠地内に散布していることが認められ遺跡として登録された。東北新幹線の路線敷は遺跡の中心部を横断する。

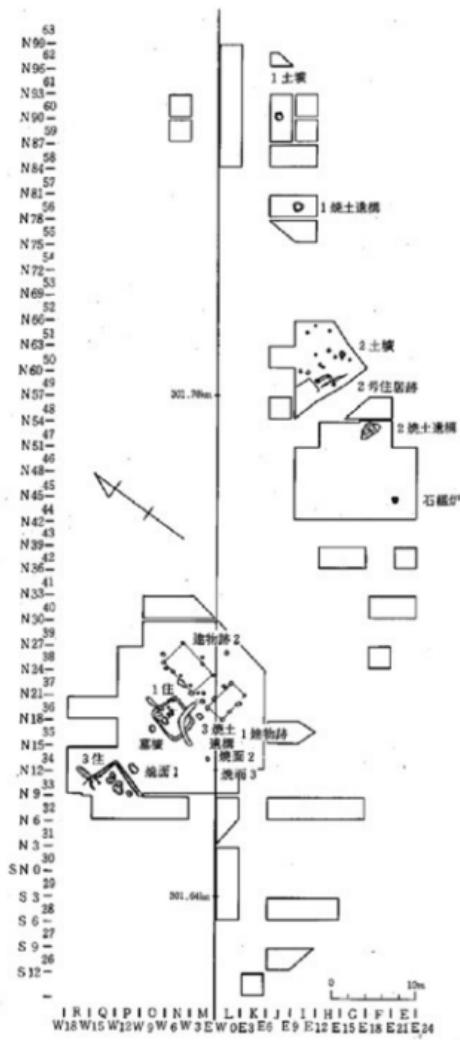
調査は東北新幹線が通る小丘陵の南西斜面と北東部の小谷間の畠地と沖積地の水田に設定した。基準杭は南西斜面にある路線中心杭301^K640M（原点1）と北側の中心杭301^K700Mを使用し、3m単位のグリッドを組んだ。そして原点1を基準としてその北側を30区、南側を29区、東側をL区・西側をM区とし、それを延長してそれぞれグリッド名を付した。調査区設定範囲は東西42×南北114mである。

調査の期間は昭和47年11月7日から昭和48年1月20日までである。発掘面積は約1,053m²である。

調査の結果、竪穴住居跡3軒、掘立柱建物跡2棟、ビット群、焼土遺構3基、焼面3ヶ所、石組炉1基、土壙2基、墓壙1基の各遺構と縄文土器・石器・弥生土器・石包丁・土師器・須恵器・中世陶器などの遺物が発見された。



第2図 グリッド配置図



第3回 通構配図

III. 調査の成果

1. 基本層位

遺跡は小丘陵の斜面から沖積地にかけて立地しており、今回の発掘調査区は小丘陵の南斜面の畑地から北東部の小谷間の畑地、さらに丘陵南側の沖積地水田部分とにわかれ。そのため調査区の基本層位は丘陵上と沖積地とで異った状況を示している。

南斜面から北東部小谷間の畑地においては7層確認された。

第Ⅰ層は暗褐色土であり、畑地の耕作土である。全域に分布している。層の厚さも10~30cmとほぼ一定している。

第Ⅱ層は極暗褐色土であり、全域に分布している。層の厚さも10~30cmとほぼ一定している。

第Ⅲ層は黒褐色土であり、地区によって色が異なる。層の厚さも一定していない。

第Ⅳ層は黒褐色土であり、層の厚さも5~40cmとほぼ一定している。N-60、H-51、E-46、I-56区付近では認められない。

第Ⅴ層は暗黄褐色土であり、層の厚さは一定していない。L-61・J-60・J-59区付近のみ分布している。

第VI層は暗褐色土であり、層の厚さも10~20cmとほぼ一定している。I・J-59区付近にのみ認められる。

第VII層は凝灰岩・黄褐色土である。

第Ⅰ~Ⅳ層から縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・中世陶器などが出土しており、特に第Ⅲ・Ⅳ層に多い。遺物は各層とも層面に対して不規則な状態で出土している。第V~VII層は地山（無遺物層）である。

竪穴住居跡・掘立柱建物跡・焼土遺構・焼面・石組炉・墓壙・溝などすべての遺構は地山面で確認されている。

南西部の沖積地水田部分においては6層確認された。

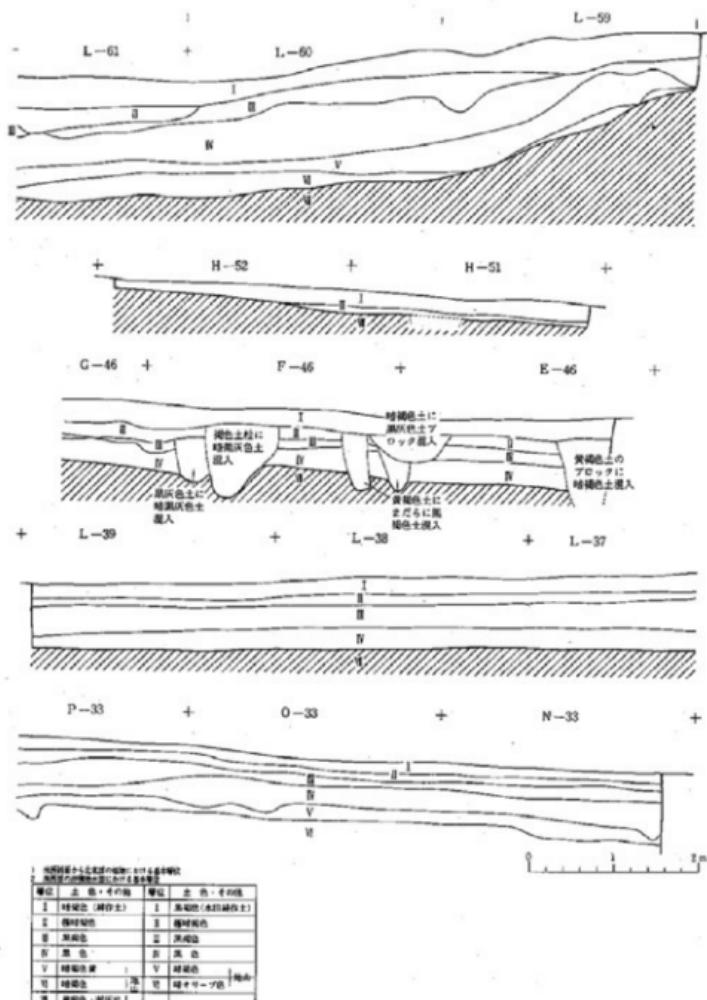
第Ⅰ層は黒褐色土であり水田耕作土である。全域に分布している。層の厚さは一定していない。

第Ⅱ層は極暗褐色土であり、全域に分布している。層の厚さは一定していない。

第Ⅲ層は黒褐色土であり、全域に分布している。層の厚さは20~30cmとほぼ一定している。

第Ⅳ層は黒色土であり、全域に分布している。層の厚さは一定していない。

第V層は暗褐色土であり、全域に分布している。層の厚さは一定しておらず、多少の凸凹が



第4図 基本層位

ある。

第VI層は暗オリーブ色土であり、0~33区付近にのみ分布している。I~29区付近では礫層となる。

遺物は第I・II層からは土師器・須恵器・陶器が、第III・IV層からは土師器・須恵器がいずれも層理面に対して不規則な状態で出土している。第V・VI層は地山（無遺物層）である。

2. 壺穴住居跡

第1号住居跡

〔確認面〕 地山面で確認された。

〔重複〕 溝によって切られている。

〔平面形・規模〕 長方形で長軸4.3m、短軸3.6mである。

〔堆積土〕 3層に大別できる。第1層は南壁際より中央にかけて、第2層は南壁際をのぞく壁際には、第3層は各壁際、周溝内に堆積している。

〔壁〕 四辺とも残っているが、南壁と西壁が溝によって一部が削平されている。壁の立ち上りは急である。壁高は約30cmである。

〔床面〕 全面的に硬く、平坦である。南壁に沿って貼床がみられるが他は地山を床面としている。

〔柱穴〕 床面で確認されたピットは6個である。配置関係に規則性がなく、柱痕跡も識別できず、柱穴は不明である。

〔カマド〕 北壁西寄りに付設されている。長さ2.4m、幅0.7mである。燃焼部両側壁は石組で構築されていたと考えられる。側壁の石は奥壁からわずかに出ていて、燃焼部幅約0.5m、奥行約0.7mである。燃焼部奥壁のゆるやかな段を境にして住居外に煙道部がのびている。長さは約1.4mである。先端には煙出しピットがみられ、煙道部の底面より約5cm深い。燃焼部底面と煙道部側壁は赤褐色に焼けている。燃焼部の奥壁中央に梢円形で長軸30cm、短軸20cmのピットが検出された。

〔貯藏穴〕 北西隅に位置する（P-1）。平面形は梢円形で、長軸30cm、短軸20cmである。

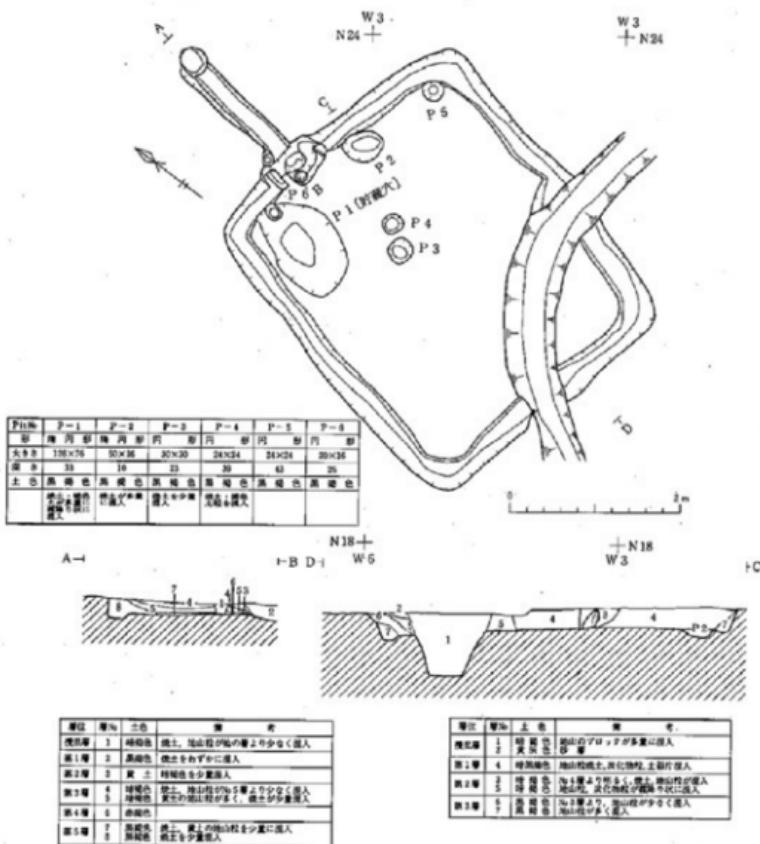
〔出土遺物〕 住居跡に伴う遺物としては床面上、ピット（P-1）内出土の遺物がある。

須恵器

壺-1は体部下半から、やや丸味をおびて立ち上がる。底部の切り離しは回転糸切り技法で底部の周縁部から体部下半に手持ちヘラケズリが加えられている。

2は体下部で屈曲し、そのまま外傾する。底部が欠損している。

3は体部から口縁部にかけて直線的に外傾する。底部の切り離しは摩滅により不明であるが

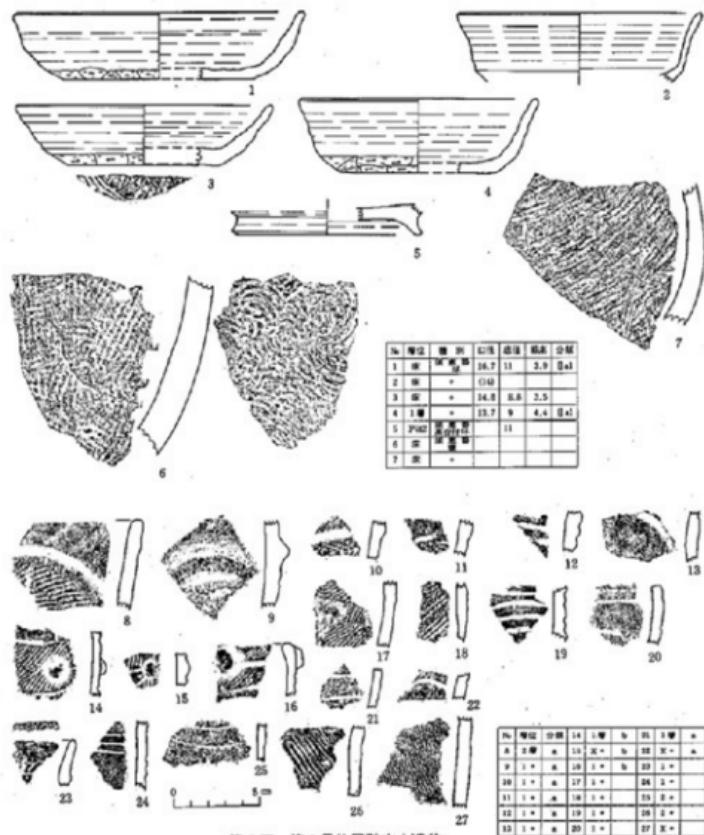


第5図 第1号住居跡

体部切り離し技法は高台接合時の調整により不明である。

高台付坏-5は底部破片である。底部切り離し技法は高台接合時の調整により不明である。

甕-6・7は体部破片で、大甕と考えられる。



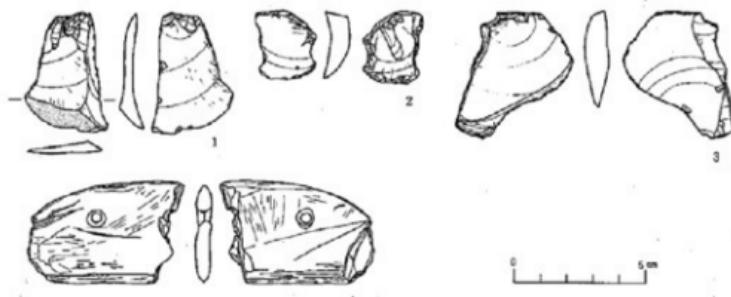
第6図 第1号住居跡出土遺物

堆積土出土遺物

縄文土器(第6図8~22)すべて破片である。8~11・17・21・22は隆線あるいは沈線と磨消縄文によって文様が描かれている。縄文は8・10・17・21・22がLR、9・11はRLである。

12・13・19・20は沈線文がみられる。14~16は貼り瘤が施され、磨消縄文による文様がみられる。18は撫糸文(R)、がみられる。

弥生土器(第6図23~27)すべて破片である。23は口縁部上端に縄文(LR)が施されてい



第7図 第1号住居跡出土遺物

る。24・25は沈線と磨消縄文(縄文原体LR)、26は撲糸文(R)、27は縄文(LR)がみられる。

須恵器

坏-4は体部からわずかに丸味をおびて立ち上る器形である。底部の切り離しは回転糸切り技法で、底部周縁に手持ちヘラケズリが施されている。

石器(第7図1~3) -1・3は縦長の剥片である。2は縦長剥片を素材とし背面の一部に調整が加えられた不定形石器である。

石包丁(第7図4) -約 $\frac{1}{2}$ が欠損しているが、半円形の石包丁と思われる。背部はわずかにふくらみをもつ。刃部は両刃で直線的である。孔は背部に近いところに2個認められ、両面から穿孔されている。器面はほぼ平坦で、整形時の擦痕が認められる。

第2号住居跡

〔確認面〕 地山面で検出された。

〔重複〕 後世の溝、方形状の掘り込みによって切られている。

〔平面形・規模〕 住居跡のほとんどが削平されているが、現存する周溝から方形と推定される。

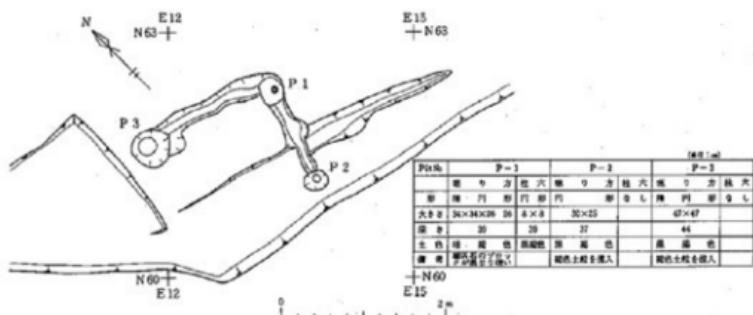
〔床面〕 削平が床面まで及んでおり検出されていない。

〔柱穴〕 周溝の残存する範囲内から3個のピットが確認された。いずれも周溝内に掘り込まれたものであり、柱穴は不明である。

〔カマド〕 検出されていない。

〔周溝〕 残存する周溝は北側1.7cm、東側1.3cmで、幅約20cm、深さ18cmである。

〔出土遺物〕 遺物は出土していない。



第8図 第2号住居跡

第3号住居跡

〔確認面〕地山面で確認された。

〔重複〕後世の溝によって切られている。

〔平面形・規模〕南西部が削平されており、現存する東壁(5.65m)・北壁(4.9m)の状況から平面形は方形と推定される。

〔堆積土〕 削平のため残っているのは2層である。第1層は住居跡中央部に、第2層はカマド上面に堆積する。

(壁) 東壁と北壁の一部が残っている。壁高は8~35cmである。

[床面] 暗褐色土によって貼床がなされている。比較的軟らかい。

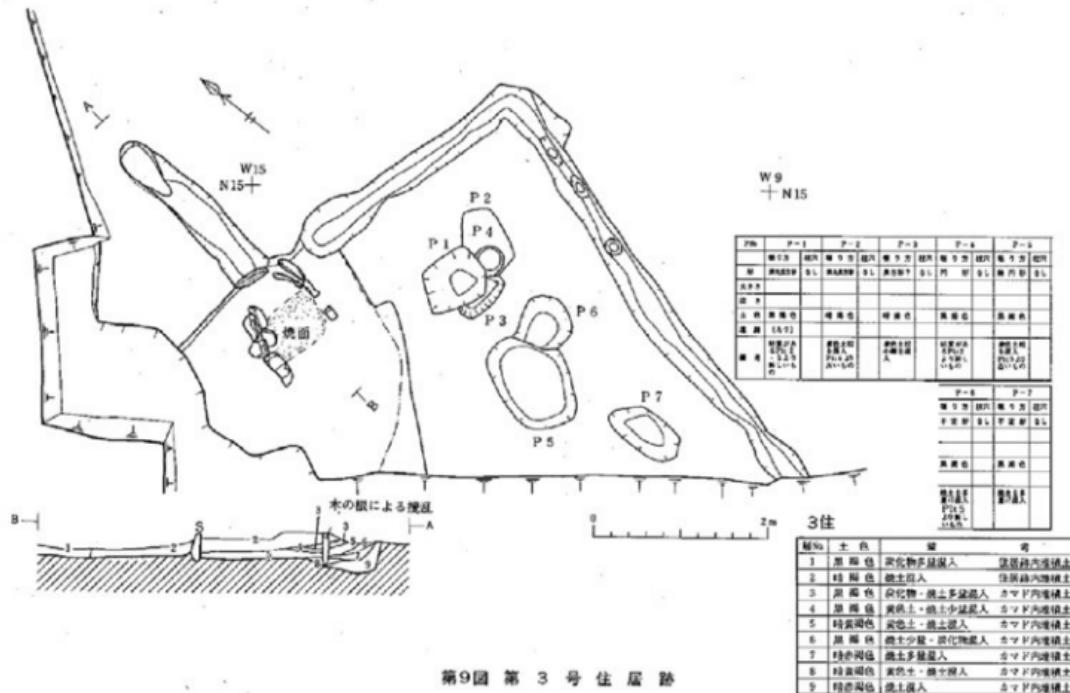
[柱穴] 床面で7個のピットが検出されているが柱穴は不明である。

〔周溝〕カマドの部分をのぞきめぐっている。幅は20~50cmで床面からの深さ約27cmである。車壁では周溝内に小さなピットが3個ある。

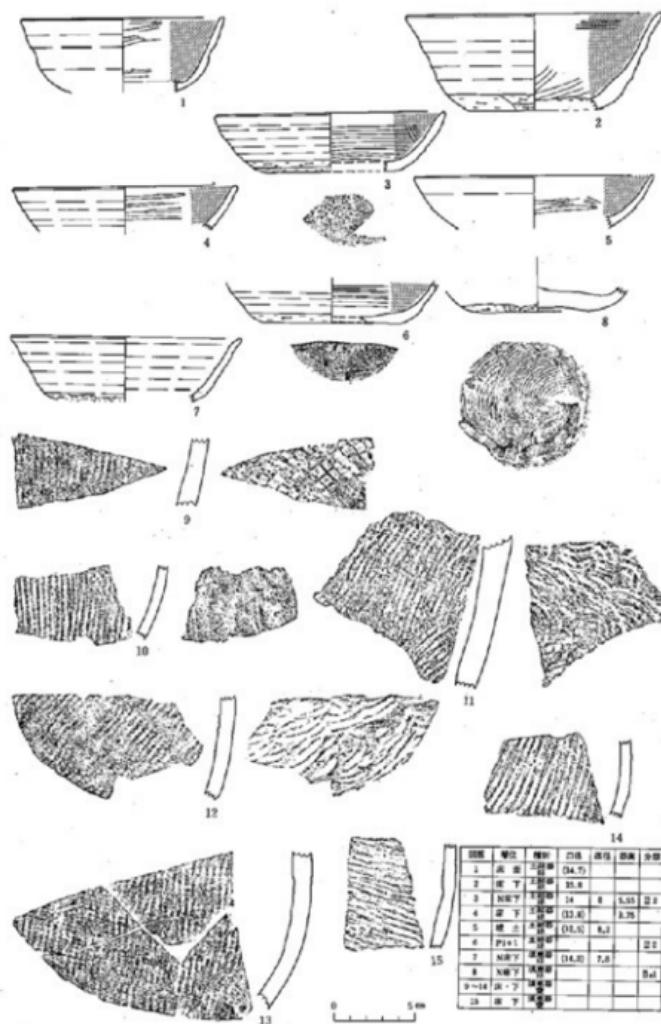
〔カマド〕 北壁の西側寄りに付設されている。長さ3.2m、幅1.1mである。燃焼部側壁は凝灰岩の切り石によって構築され、掘り方がある。燃焼部内の幅は0.7m、奥行1.1mである。燃焼部から奥壁の段を境にして煙道部が住居外にのびている。煙道部の長さは約2.1mである。先端に煙出しピットがみられ、煙道底面より約6cm深い。燃焼部側壁、底面と煙道部側壁は赤褐色に塗けている。

貯藏穴 南側に位置する（P-5）。楕円形で長軸120cm、短軸84cm、深さ44cmである。

〔出土遺物〕 住居に伴う遺物としては貼床、ピット(P1, 5)内出土の遺物がある。



第9回 第3号住居跡



第10図 第3号住居跡出土遺物

住居に伴う遺物

土師器

坏-1・4は口縁部から体部下端にかけての破片である。ややふくらみをもって立ち上がる。外面はロクロ調整、内面はヘラミガキ・黒色処理が施されている。

2は口縁部から体部下端にかけての破片である。ややふくらみをもって立ち上がる。外面はロクロ調整・内面はヘラミガキ・黒色処理されている。体部下端に手持ちヘラケズリが加えられている。

3はやや丸味をもって外傾する。外面はロクロ調整・内面はヘラミガキ・黒色処理が施されている。底部の切り離しは再調整のため不明である。底部から体部下端にかけて回転ヘラケズリが加えられている。

6は体部下半から底部にかけての破片である。外面はロクロ調整、内面はヘラミガキ・黒色処理が施されている。底部の切り離しは再調整のため不明である。底部から体部下端にかけて回転ヘラケズリが加えられている。

須恵器

坏-7は口縁部から体部下端にかけての破片である。体部下端に手持ちヘラケズリが加えられている。

8は体部下端から底部にかけての破片である。底部の切り離しは糸切り技法によるものでロクロは右回転である。体部下端に手持ちヘラケズリが加えられている。

甕一体部破片（9-15）である。

堆積土出土遺物

縄文土器（第11図1～5）すべて体部破片である。1は沈線と磨消縄文・刺突によって、2・3は沈線によって文様が描かれている。縄文原体はLRである。4は撚糸文（R）、5は斜行縄文（LR）が施されている。

弥生土器（第11図6～8）すべて体部破片である。6は沈線と磨消縄文がみられる。縄文原体はLRである。7・8は斜行縄文（LR）がみられる。



第11図 第3号住居跡出土遺物

土師器

壺-5は口縁部から体部下半にかけての破片である。外面はロクロ調整、内面はヘラミガキ黒色処理が施されている。

3. 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は発掘区の中央部西側で2棟検出された。

第1号建物跡

L-37区付近で検出されている。確認面は地山面である。建物跡は桁行3間×梁間1間の東西柱間寸法は北側桁行で東から、 $0.9+1.8+1.3m$ （約13.3尺）、南側桁行で同じく $1.3+1.3+1.4=4m$ （約13.3尺）を測る。各社間寸法は一定していない。また東・西側梁間 $2.3m$ （約7.7尺）を測る。

掘り方は、円形・楕円形・方形・長方形などの形状をしており、大きさもまちまちである。

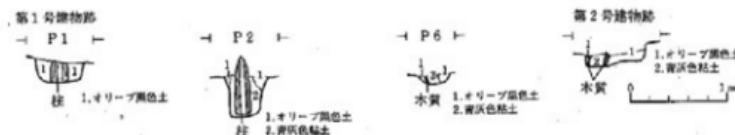
掘り方には、柱の残存しているものと柱痕跡のあるものとがある。

第2号建物跡

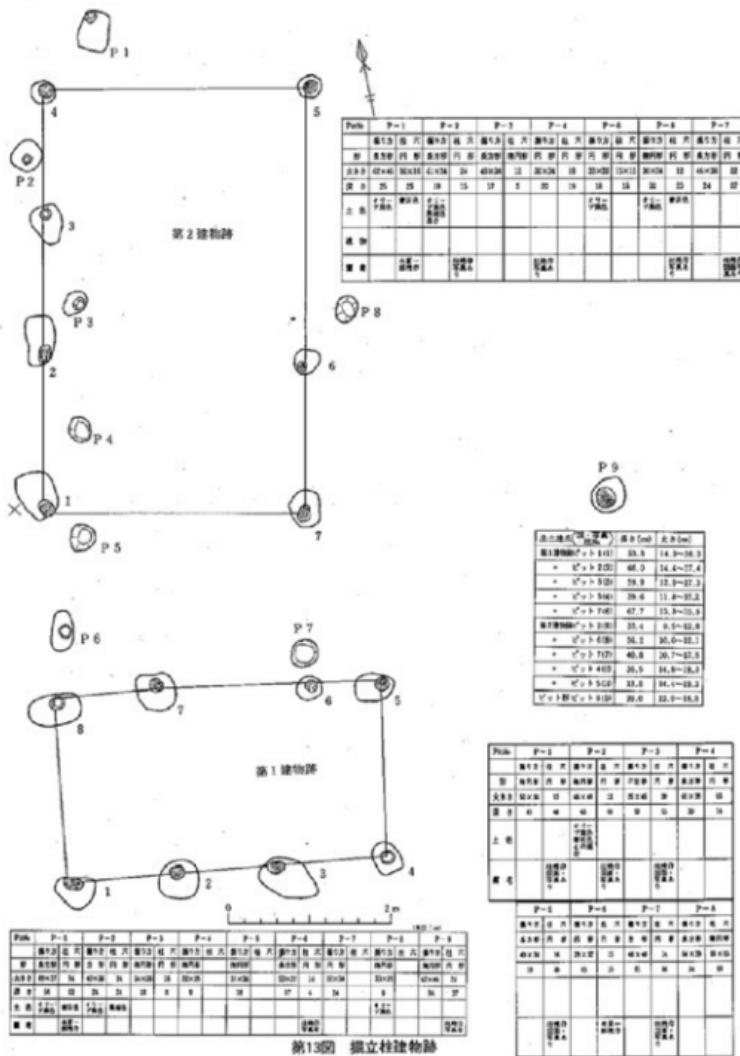
第1号建物跡の北側に隣接して検出されている。確認面は地山面である。建物跡は桁行3間×梁間1間の南北棟である。西側桁行で方向はN-10°-Eである。東側桁行のうち、北から二つめの柱穴は検出されていない。

柱間寸法は西側桁行で北から、 $1.55+1.8+1.8=5.15m$ （約17.2尺）、東側桁行で同じく $3.4+1.8=5.2m$ （約17.3尺）を測る。各社間寸法はまちまちである。また北・南側梁行 $3.2m$ （10.7尺）を測る。

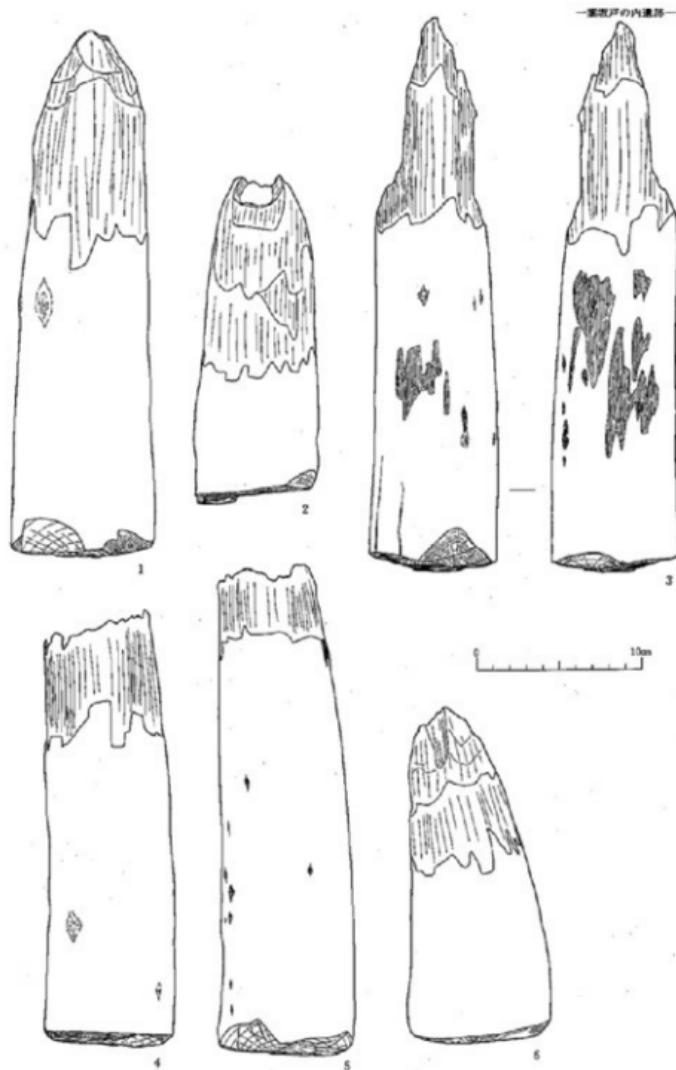
掘り方は円形・楕円形・長方形などと形状は一定していない。大きさもまちまちである。掘り方向には、柱が残存しているものと柱痕跡があるものとがある。



第12図 柱穴断面図



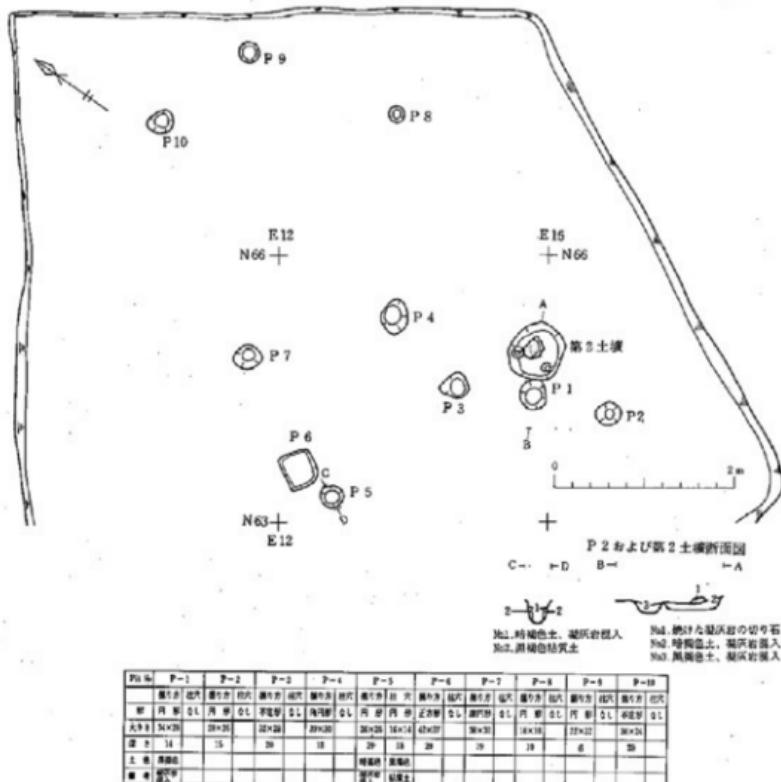
第13回 埋立柱建物跡



第14図 柱

4. ピット群

ピット群は発掘区中央部の北側、H-50区付近と発掘中央部、掘立柱建物跡付近を中心に検出されている。ピット群の確認面は地山面である。柱痕跡や柱の残存するものもあるが、他のピットと組み合わない。



第15図 H-50区付近のピット群および第2土壤

5. 土壌

第1土壤

J-60区とJ-61区の間の西側寄りで検出されている。

〔確認面〕 確認面は地山面である。

〔平面形・規模〕 平面形は楕円形で長軸10cm、短軸8.5cm、深さ30cmである。

〔堆積土〕 大別すると2層に分かれる。第2層は多量の焼土や炭化物を含む。

〔底面・壁〕 底面は中央部がわずかに深く、壁周縁で西側に傾斜している。壁は底面からゆるやかに立ち上がる。

〔遺物〕 遺物は出土していない。

第2土壤

H-51区の南側で検出された。

〔確認面〕 確認面は地山面である。

〔平面形・規模〕 平面形はほぼ円形で径6.6cm、深さ15cmである。

〔堆積土〕 1層である。

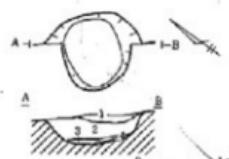
〔底面・壁〕 底面は平坦である。壁は底面からゆるやかに立ち上がる。

〔遺物〕 ピット内の底面から土師器、須恵器が出土している。

土師器

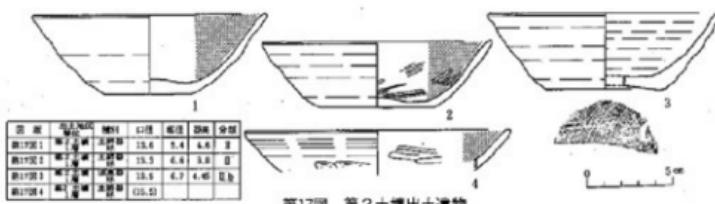
坏-1・2はややふくらみをもって立ち上がる。外面はロクロ調整、内面はヘラミガキ・黒色処理が加えられる。底部の切り離しは再調整のため不明である。底面に手持ちヘラケズリが加えられている。4は口縁部から体部下間にかけての破片である。

須恵器



第16図 第1土壤

層位	層	土名	備考
第1層	1	高砂地	焼く高砂した焼粒を混入
	2	堆積土	水洗高砂した焼粒を少量化入
第2層	3	堆積土	焼土を少量、や段々多量に混入
	4	堆積土	焼土を多量に混入



第17図 第2土壤出土遺物

坏-3は直線的に外傾する。底部切り離しは回転糸切り技法によるもので、再調整はない。

6. 焼土遺構

焼土遺構は発掘区の北側に1基、中央部東側に1基、中央部西側に1基、合計3基検出されている。

第1焼土遺構

J-57区の西側寄りで検出されている。

〔確認面〕確認面は地山面である。

〔平面形・規模〕平面形は不定形で長軸100cm、短軸75cm、深さ20cmである。

〔堆積土〕2層にわかれ。第2層に焼土・炭化物を含む。

〔底面・壁〕底面は東側にわずかに傾斜している。北側が一段高くなつて浅くなっている。壁は底面からゆるやかに立ち上がる。

〔使用痕跡〕底面の北側の部分が火熱を受けている。

〔遺物〕人骨片が出土している。

第2焼土遺構

J・F-48区で検出されている。

〔確認面〕確認面は地山面である。

〔平面形・規模〕平面形は不定形で長軸270cm、短軸140cm、深さ35cmである。中央部から南側寄りには3個の凝灰岩と河原石が配されており、中央部の凝灰岩の北側にも1個の河原石が配されている。これらの石には掘り方が認められる。

〔堆積土〕中央部から5層にわかれ。第2・4・5層に焼土・木炭を含む層である。

〔底面・壁〕底面はほぼ平坦で、壁はゆるやかに立ち上がる。

〔使用痕跡〕側壁の一部分と配されている4個の石が火熱を受けて焼けている。

〔遺物〕遺物は出土していない。

第3焼土遺構

M-37区北側で検出されている。

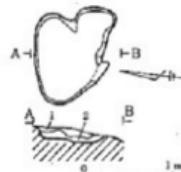
〔確認面〕確認面は地山面である。

〔平面形・規模〕平面形は隅丸長方形で、長軸40cm、深さ18cmである。

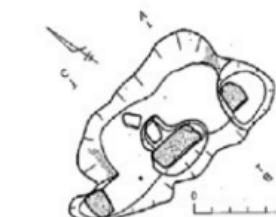
〔堆積土〕2層に分かれ、1・2層とも焼土・炭化物を含む層である。

〔底面・壁〕底面は中央部がわずか歪曲み、北側に傾斜している。壁は底面からゆるやかに立ち上がる。

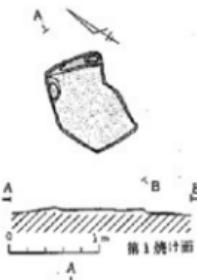
〔使用痕跡〕底面と側面が火熱を受けており、特に南側の部分の側壁が焼けて堅い。



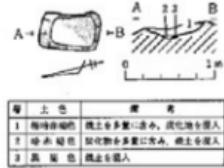
第1焼土遺構
■ 土色 備考
1 暗褐色 焼土が多量に混入
2 黑褐色 人骨等・焼土・木炭が混入



第2焼け面
■ 土色 備考
1 暗褐色 焼土が多量に混入
2 黑褐色 木炭等
3 暗褐色 木炭等
4 黒褐色
5 黑褐色
6 暗褐色 やや焼土が混入 燃
7 暗褐色 よごれた焼土で骨が混入

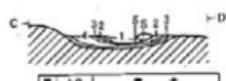


第3焼け面
■ 土色 備考
1 暗褐色 焼土を多量に含み、炭化物を混入
2 黑褐色 木炭等
3 黑褐色 木炭等を多量に含み、焼土を混入
4 黒褐色 焼土を混入



第3焼土遺構
■ 土色 備考
1 暗褐色 焼土を多量に含み、炭化物を混入
2 黑褐色 木炭等
3 黒褐色 木炭等を多量に含み、焼土を混入
4 黒褐色 焼土を混入

第18図 焼土遺構



第1焼け面
■ 土色 備考
1 暗褐色 焼土・木炭が混入
2 黑褐色 木炭等
3 黑褐色 木炭等
4 暗褐色 焼土色・焼土・木炭が混入
5 黑褐色 木炭等

第2焼け面



第3焼け面

〔遺物〕堆積土2層から骨粉が出土している。

7. 焼面

焼面は発掘区南側西寄りで3基検出されている。

第4号住居跡東側で検出されている。

〔確認面〕確認面は地山面である。

〔平面形・規模〕平面形は1.1×0.6mのほぼ長方形である。北側に壁のように立ち上りが「L」字状に認められる。底面から4cm立ち上がる。

〔堆積土〕ない。

〔底面・壁〕底面はほぼ平坦で、北側でゆるやかに立ち上がる。

〔使用痕跡〕底面全体が火熱を受け、堅く焼けた面である。

〔遺物〕 遺物は出土していない。

第2焼面

M-35区の中央で検出されている。

〔確認面〕 確認面は第IV層、黒色土中である。

〔平面形・規模〕 平面形は梢円形で長軸50cm、短軸40cmである。

〔堆積土〕 堆積土は1層である。

〔底面〕 底面の中央に径20cm、深さ4cmの円形のピットが検出されている。

〔使用痕跡〕 底面からピット内の周縁・底面に火熱を受けて焼けている。

〔遺物〕 遺物は出土していない。

第3焼面

第2焼面の約1m南側で検出されている。

〔確認面〕 確認面は地山面である。

〔平面形・規模〕 平面形は円形で長軸20cm、短軸18cmである。

〔堆積土〕 堆積土は1層である。

〔底面〕 底面の中央に径6cm、深さ7cmの円形のピットがある。

〔使用痕跡〕 火を受けて焼けている。底面からピット内の周縁・底面にかけて火熱を受けて焼けている。

〔遺物〕 遺物は出土していない。

8. 石組炉

F-45区北側で検出されている。

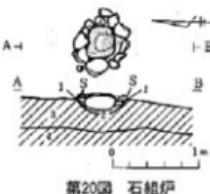
〔確認面〕 確認面は地山面である。

〔平面形・規模〕 平面形は梢円形で、長軸80cm、短軸60cmである。中央部には長方形の自然石凝灰岩が使用され、まわりに14個の礫が配されている。これらの石組の下には深さ20cmの掘り方が認められる。

〔使用痕跡〕 中央部の凝灰岩上面が火熱を受けており、この石と礫との間には部分的に焼土が認められる。

〔遺物〕 遺物は出土していない。

層位	層番	地 色	備 考
第1層	1	褐色褐色	焼土が多く炭化物を少々含み、バサバサしている。
第2層	2	褐色褐色	H-1より焼く焼土・炭化物がH-1より少々多く焼くしまっている。
第3層	3	黑色	凝灰岩質土が混入、地山
第4層	4	黃褐色	地山



第20図 石組炉

9. 墓壙

墓壙は10-36区で検出されている。

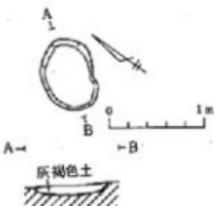
〔確認面〕 確認面は地山面である。

〔堆積土〕 堆積土は1層で灰褐色土である。

〔平面形・規模〕 平面形は橢円形は長軸80cm、短軸5cm、深さ17cmである。

〔堆積土〕 堆積土は1層で灰褐色土である。

〔出土遺物〕 堆積土中より古銭(寛永通宝)が出土している。



第21図 墓 壙

10. 溝

溝は第2号住居跡を切って、弓状に東南方向にのびる。確認面は第2層である。幅0.3~0.4m、深さ0.5~0.8mで断面形は逆台形である。遺物は土師器、須恵器などの小破片が、わずかに堆積土から出土している。

11. 遺構以外の出土遺物

遺構外で発見された遺物としては、縄文土器・円板状土製品・石器・弥生土器・土師器・須恵器・石製品・中世陶器・鉄製品・陶器などがある。

(1) 縄文土器 (第22・23図)

縄文土器はすべて破片であり、磨滅が著しい。文様単位の判明するものではなく、その特徴的文様表現技法と文様展開について観察すると次のようなものがある。

口縁部

1~3は横位の隆線が施文されている。4~7は隆線とそれに接する沈線によって文様が描かれており、5は渦巻文となっている。4~6は区画文様で区画内に縄文がみられる。8~10は沈線による区画文様が施文され、10は区画内に刺突が施されている。11は横位2条の沈線とその上位に刺突が施文されている。12は口縁部が無文、13は口縁部が無文で体部に斜行縄文が、14は口縁部から体部に斜行縄文が施されている。15は注口部の破片である。

体部

16~31は隆線によって区画された一方の部分に縄文が施文されている。32・33は粘土紐貼付文がみられる。34は隆線によって渦巻文が描かれている。35~44は隆線とそれに接する沈線によって区画文様が描かれ、35~43は区画された方に縄文が施されている。45~64は沈線のみによって区画文様が描かれ、45~62は区画された方に縄文が施されている。65~92は斜行縄文がみられる。



第22図 遺構以外の出土遺物(縄文土器)



第23図 遺構以外の出土遺物(縄文土器)

図版	地区-層位	分類	24	M-38-39-4	a	48	M-34-4	a	72	P-37-5
1	M-38-39-4	a	25	M-N-40-4	a	49	L-34-4	a	73	O-36-4
2	Q-33-3	a	26	P-36-4	a	50	M-35-4	a	74	O-36-4
3	P-37-4		27	O-40-4	a	51	L-M-34-4	a	75	L-35-4
4	O-36-4	a	28	N-35-4	a	52	L-35-4	a	76	L-35-4
5	M-38-4	a	29	N-36-4	a	53	O-34-4	a	77	L-M-34-4
6	M-35-4	a	30	R-34-4	a	54	O-38	a	78	L-M-34-4
7	P-35-4	a	31	X-X	a	55	P-38-3	a	79	L-M-34-4
8	M-34-4	a	32	I-47-3	a	56	P-38-4	a	80	L-M-34-4
9	N-33-1	a	33	L-N-34-4	a	57	P-35-4	a	81	M-40-4
10	N-34-4	a	34	N-33-1	a	58	N-36-4	a	82	M-N-40-4
11	H-47-2		35	O-36-4	a	59	N-34-36	a	83	M-35-4
12	M-34-4		36	M-34-4	a	60	N-36-4	a	84	O-34-4
13	K-34-4	a	37	M-35-4	a	61	O-34-4	a	85	P-36-4
14	P-37-4		38	M-35-4	a	62	Q-33-3	a	86	N-36-4
15	L-M-34-4	a	39	L-M-34-4	a	63	Q-33-3	a	87	L-35-4
16	L-39-4	a	40	N-34-36	a	64	P-38-4	a	88	M-35-4
17	L-36-4	a	41	O-36-4	a	65	M-N-40-4	a	89	M-35-4
18	M-34-4	a	42	O-38	a	66	Q-36-4	a	90	M-39-4
19	M-35-4	a	43	N-36-4	a	67	N-38-4	a	91	L-M-34-4
20	M-35-4	a	44	O-34-4	a	68	O-36-4	a	92	
21	M-35-4	a	45	O-36-4	a	69	O-36-4	a	93	
22	H-47-4	a	46	N-O-33	a	70	O-36-4			
23	M-34-4	a	47	N-34-4	a	71	O-35-4			

底部

93はわざかに揚底になっている。

(2) 弥生土器（第24図）

弥生土器はいずれも破片で、器形・文様単位の判明するものはない。

口縁部

1は横位の平行沈線がみられ、以下に縄文が施されている。2は撚糸文のあるものである。

3は口縁端に縄文が押圧され、頸部に列点刺突文が付されるものである。

4～9は沈線が施されるもので、太い沈線と細い沈線がある。10は列点刺突文がみられる。

11～22には斜行縄文撚糸文が施されている。

(3) 土師器（第25・26図）

坏 いずれも製作にロクロを使用しており、外面にロクロ調整、内面にヘラミガキ・黒色処理が施されている。

1～5はいずれも丸みをもって立ち上がる。1・2・4は体部下端から底部にかけて手持ちヘラケズリが加えられており、切り離し技法は不明である。

3は底部の切り離しがヘラ切り技法である。体部下端に回転ヘラケズリが加えられている。

5は摩滅のため底部の切り離し技法が不明である。

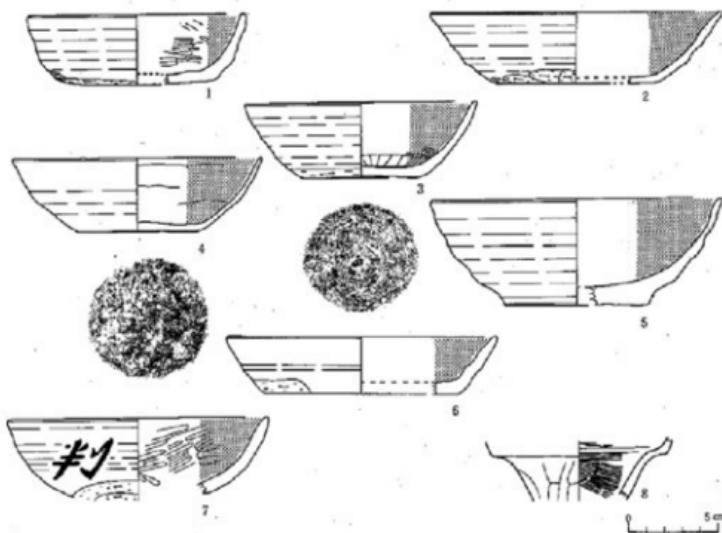
6は直線的に短く外傾する。内面は摩滅のため不明である。底部の切り離しは回転系切り技法である。体部下端に手持ちヘラケズリがみられる。

7は口縁部から体部にかけての破片である。体部下端に手持ちヘラケズリが加えられている。

なお体部に「判」の墨書がある。



第24図 遺構以外の出土遺物(弥生土器)



第25図 遺構以外の出土遺物(土師器)



第26図 造模以外の出土遺物(土師器)

壺・8は頸部から口縁部にかけての破片である。口縁部の中央がくびれて段がつき、外面に稜がめぐる。段の上半の内面にわざかに刷毛目が施されている。下半は外傾し、外面にペラミガ内面に刷毛目が施されている。

甕・9は製作にロクロを使用していない。頸部から口縁部にかけて「く」の字状に屈曲して外反する。口縁部の内外面とも刷毛目のち、横ナデ、体部は内外面ともペラミカキが施されている。10・11はいずれも製作にロクロを使用している。10は口縁部が外傾し、端部が角ばる。11は上方にわざかにつまみだされる。

(4) 須恵器 (第27~30図)

坏 直線的に外傾するものと、やや丸味をもつて外傾するものがある。12・14・15は底部の切り離しが回転糸切り技法であり、12・15は体部下端に手持ちヘラケズリが、14は体部下端に回転ヘラヘズリが加えられる。

13は底部の切り離しがヘラ切り技法である。

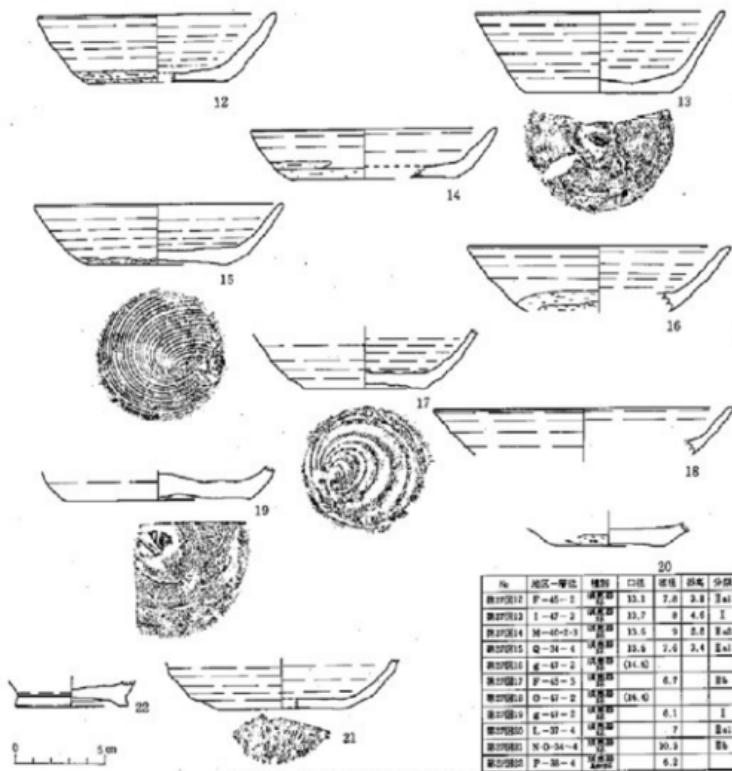
17・19~21は底部破片、16・18は体部破片である。底部の切り離しは19がヘラ切り技法、17・20・21が回転糸切り技法である。15と20には体部下端に手持ちヘラケズリが施されている。

高台付坏 (22) 底部の破片である。底部の切り離しは回転糸切り技法である。

蓋 被片である。23は天井部に回転ヘラケズリを施し、中央に偏平な宝珠形のつまみをもつ。24は口縁部が外反し、端部が下方に折れ曲がる。

壺 25~27は口縁部の破片で、25・26は口縁部が外傾し、縁帶状に強く上下につまみ出される。27は口縁部が外反し、縁帶状に下方に強くつまみ出される。30~34は体部から底部の破片で底部に高台が付く。外面はロクロ調整、刷毛目・ロクロ調整とヘラケズリ・回転ヘラケズリのされているものがある。内面はロクロ調整・刷毛目・ロクロ調整のちナデが施されているものもある。底部の切り離し技法は高台接合時の調整のため不明である。29・39は肩部片である。

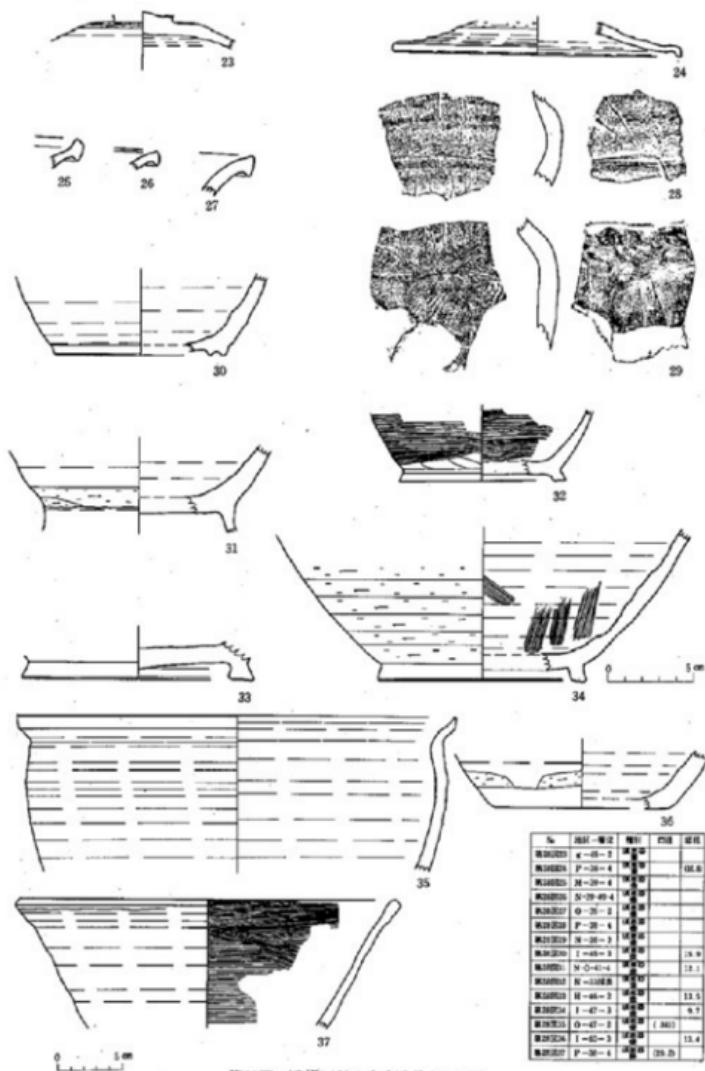
甕 すべて被片である。35は胴部から口縁部にかけての破片である。頸部でくびれ、口縁部



第27回 遺構以外の出土遺物(須恵器)

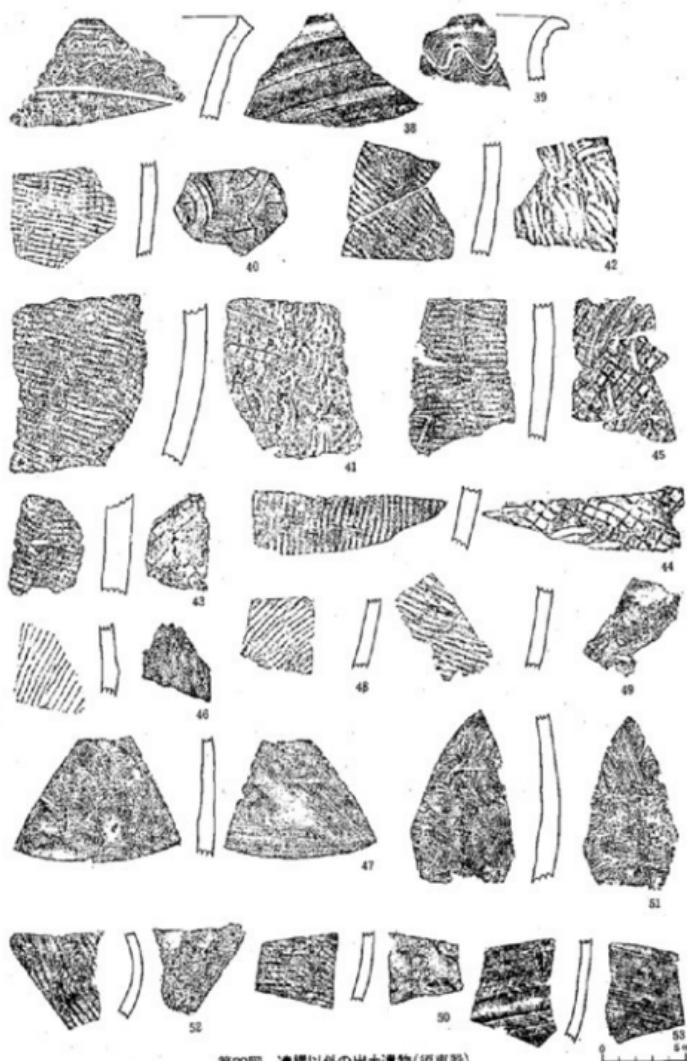
が外反し、口縁端は上方につまみだされている。内外面ともロクロ調整痕がみられる。38は口縁部で外反し、口縁端部はわずかに上方につまみだされている。外面には口縁端部の近くで一本の沈線をめぐらし、口頸部に波状文が2段あり、これを上・下に区画する1本の沈線がある。39は口縁部で外反し、口縁端部は横方向につまみだされている。外面には口縁部近くに断面三角形の凸帯があり、口頸部に荒い波状文をめぐらしている。40～61は体部の破片で、外面にロクロ調整、ヘラケズリ、平行叩き、格子叩きなどがある。内面には同心円・平行・格子あて目・刷毛目、ロクロ調整などがある。36の底部にはヘラケズリが施されている。

鉢(37) 口縁部から体部の破片である。口縁部は外傾し、口縁端は丸味をおびている。外面はロクロ調整、内面はナデ調整痕が認められる。

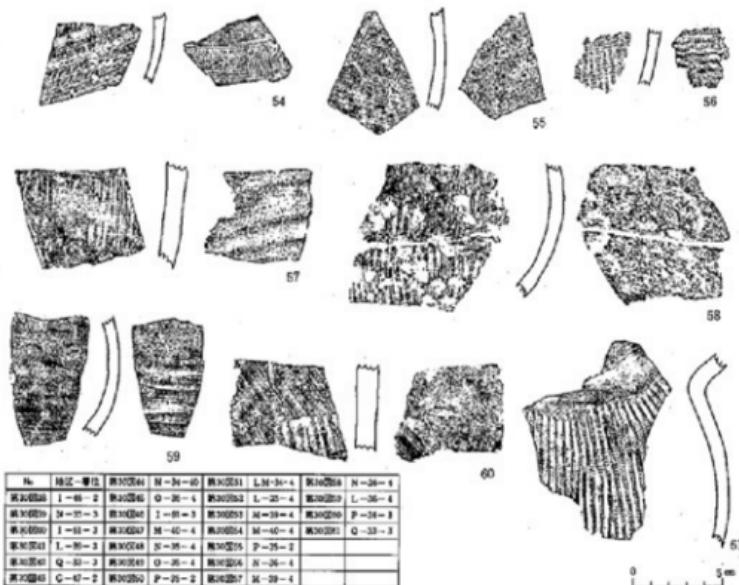


第28図 遺構以外の出土遺物(須恵器)

No	JAH-49-2	年	件目	年目
M252023	4-01-2	19		
M252023	P-30-4	19		(20.8)
M252023	H-20-4	19		
M252023	S-19-49-4	19		
M252023	O-20-2	19		
M252023	P-20-6	19		
M252023	N-20-3	19		
M252023	I-00-1	19		(20.9)
M252023	M-0-41-4	19		(21.1)
M252023	K-11-10-8	19		
M252023	H-00-2	19		(11.5)
M252023	I-01-2	19		9.7
M252023	O-01-2	19		(10.8)
M252023	I-00-2	19		13.4
M252023	P-30-4	19		(19.2)



第29図 造機以外の出土遺物(須恵器)



第30図 遺構以外の出土遺物(須恵器)

(5) 土師質土器 (第31図)

III. 62~64、66~69は直線的に短かく外傾する。65はややまるみをもって立ち上がる。内外面ともロクロ調整が施されている。底部の切り離しは回転糸切り技法で再調整はない。

(6) 陶磁器

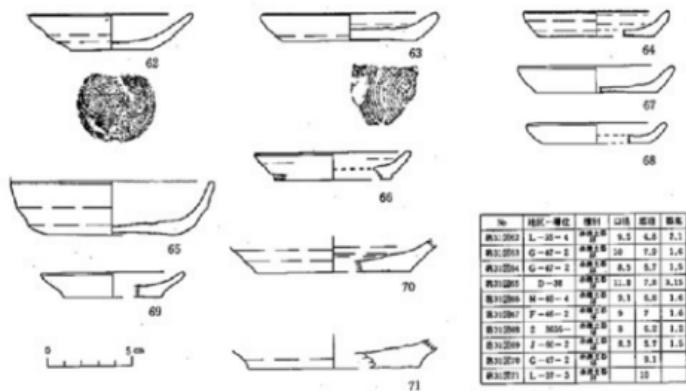
(中世陶器) (第32~35図)

甕・壺・鉢の破片がある。

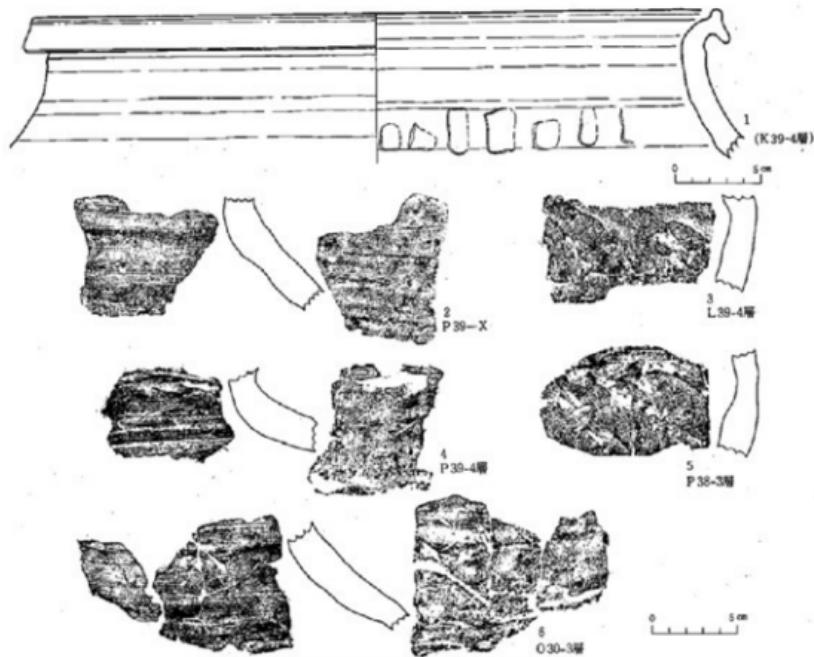
甕

1は口縁部から頸部の破片である。頸部が比較的短く「八」の字形に広がる。口縁部は短かく外側に折れ、N字状をなしている。その先端は上下につまみだされ、上方に幅のせまい口縁帯を形成し、その内側は受口状になる。器面の調整は、外面で横ナデ調整痕がみられる。内面で口頸部に横ナデ調整痕がみられる。頸部から肩部に移行する部分には指でおさえた痕跡(指痕)が1列めぐる。

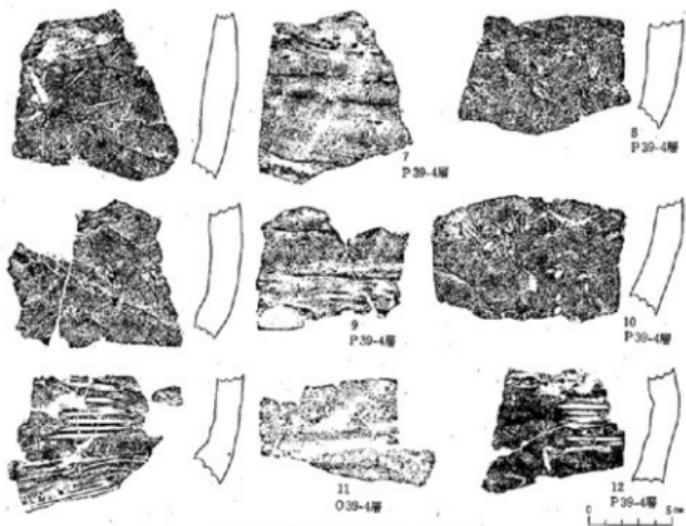
2~12は体部破片である。器面の調整は、外面でナデ、ケズリの調整痕がみられる。なお一



第31回 遺構以外の出土遺物(土師質土器)



第32回 遺構以外の出土遺物(中世陶器)



第33図 遺構以外の出土遺物(中世陶器)

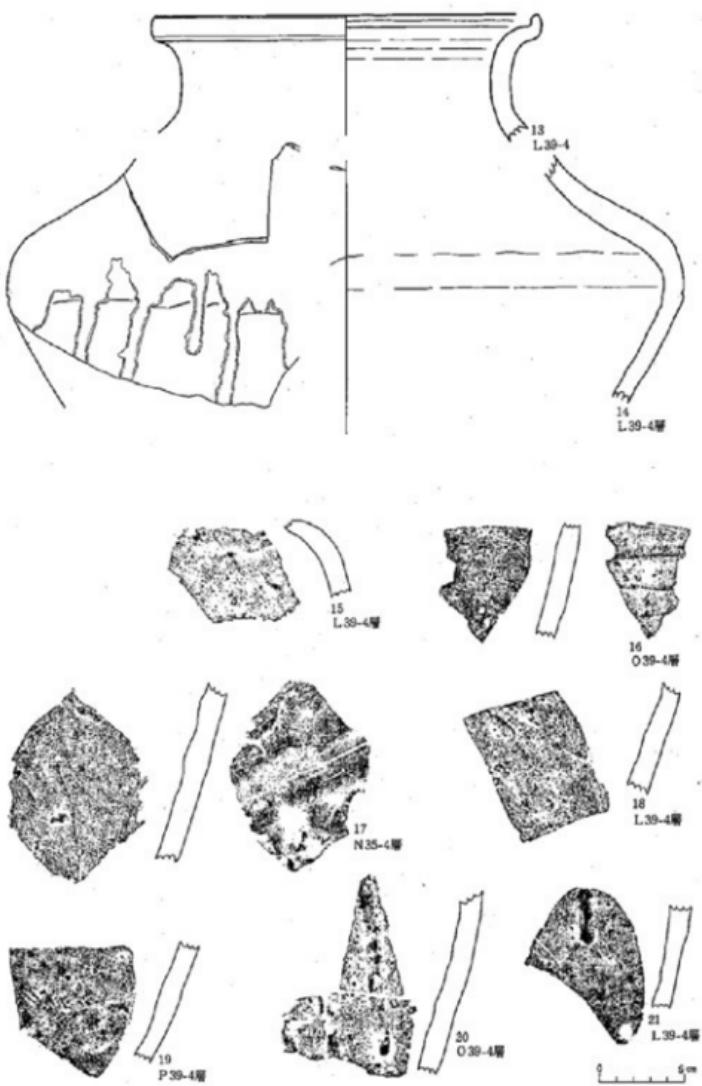
部の被片には幅3mmほどの凹状の叩き目と考えられる調整痕のみられるものがある(11・12)。内面にはナデ、3~5cm幅の単位で粗いナデツケ調整がなされている。また約4cmの幅で粘土瘤巻上げ痕が観察されるものもある。色調は赤褐色と褐灰色を基調としている。以上の胎土は、断面をみると赤褐色のものと褐灰色のものがある。砂粒をふくむ。赤褐色のものは非常に堅く焼きしまっているが、褐灰色のものは焼きが甘く、軟かくようである。

壺

13は口縁部から頸部の破片である。頸部は直立ぎみに立ち上がり、口縁部はやや外反する。その先端は内面で直角に近く上方につまみ出されせまい縁帯になる。甕の場合と同様にいわゆる受口状を呈する。外面では光沢のある赤褐色であり、口縁部から頸部にかけ暗オリーブ色の自然釉部分と、砂粒が附着しザラザラしている部分もある。内面は横ナデ調整痕がみられる。

14は肩部の破片で、15と同一個体とも考えられる。肩部はややまるみをもつ。器面の状況は13と同じである。

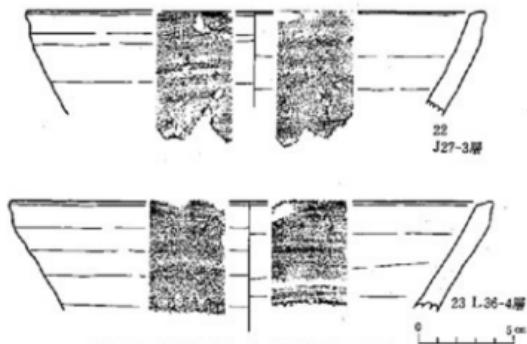
15~21は体部の破片である。器面調整は外面でヘラケズリの痕跡がみられる。また外面にオ



第34図 遷構以外の出土遺物(中世陶器)

リーブ黄色の自然釉が部分的に附着している破片（20・21）がある。内面に前述したような粗いナデ調整痕がみられる。

以上の胎土は断面で赤褐色を基調としており、砂粒をふくらむ。非常に堅く焼きしまっている。



第35図 遺構以外の出土遺物(中世陶器)

鉢

22・23は鉢の破片で擂鉢と考えられる。体部から口縁部にかけてやや内窪する。口径は不明であるが、25~27cmと考えられる。口縁端は平坦で、やや角ばった感じの口縁部となる。器面調整は内外面とも全面が丁寧に横ナデ調整されている。内面に筋目はつかない。器面には凹凸がめだつ。胎土は断面をみると22はにぶい赤褐色であり、23は橙色で両者とも内外面とも同じ色調である。砂粒をまじえ、硬く焼き締まっている。

(青磁) (第36図)

1は青磁小皿の破片である。内外面とも反オリーブ色釉がかかり、内面に櫛状の模様をわずかに残している。13~14世紀ごろのものと考えられている。

(近世以降の陶磁器) (第36図2~17)

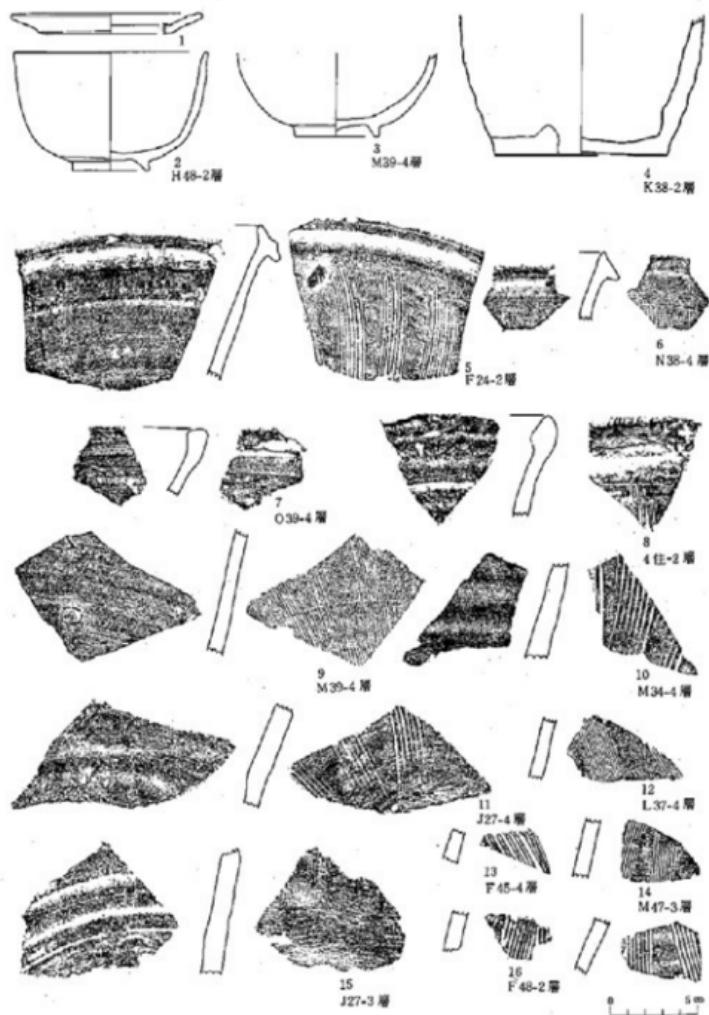
陶器は明オリーブ灰色を呈し、復元口径16.6cmを計る皿、明緑灰色、灰色を呈する茶碗（2・3）と暗オリーブ色を呈する壺と考えられるもの（4）がある。他に古瀬戸・伊万里焼の破片が各1点みられる。また擂鉢（5~17）の破片がある。暗赤褐色の鉄釉や淡黄色などの釉が内外面にかかつたもので、すべて内面に5~9本の単位の筋目がついている。

(7) 泥面子

円板状を呈し、橙色で雀の模様を象どっている。（図版22-18）。径2.3mの小さいものである。

(8) 石器

石鎌（第37図1）刃部先端を欠損している。無茎で基部にえぐりが入り、凹む。両面に細かい



第36図 遺構以外の出土遺物(磁器・陶器)

な調整が施されている。

剥片（第37図2～5）2は横長の、4・5は縦長の剥片である。

(9) 有孔円盤（第37図6）

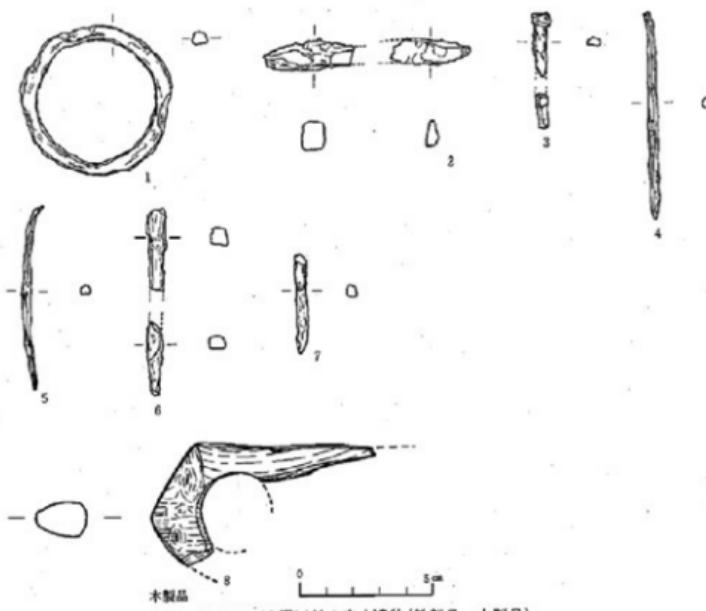
約 $\frac{1}{2}$ が残存しており、中央に1つの貫通孔がある。周縁部はまるみをおびている。

(10) 砥石（第37図7～12）

ほとんどが破損している。台形状のもの（7・8）と薄い板状のもの（9～12）がある。前者は現存する4面が使用され、上端部はかなり使用されている。後者は構造にくぼみをもつもの（9・10）と平坦なもの（11・12）とがある。3～4面が使用面として残っている。



第37図 遺構以外の出土遺物(石製品)



第38図 遺構以外の出土遺物(鉄製品・木製品)

(11) 鉄製品 (第38図)

破損品が多く、図示できたのは7点ある。

1はリング状のもので、径5.7cm、太さ6mmのものである。断面は方形と考えられる。

2は刀子の破片で、刀身部と茎の一部である。刀身部は現存長3cmで、背は平坦で平造りである。茎の部分は現存長3.5cmで柄の木質部分がわずかに残っている。

3は釘と考えられるもので、上端で横に折り曲げられている。断面は長方形をしている。

4~7は棒状のものである。長さ3.7~7.8cmの破損品で、断面は方形のものであり、釘の一部と考えられる。

その他に鉄滓が少量出土している。

(12) 木製品 (第38図)

幅4.6cm、厚さ1cmで手鉤状に残存している。先端部と思われるところより1.5cmで大きさ約3cmの円形と考えられる孔が一つある。周縁部は削られている。

(13) 古銭

寛永通宝1枚と文字不明の古銭1枚が出土している(図版22-19・20)。

IV. 遺構・遺物に関する問題点

1. 出土土器

〔縄文土器〕

縄文土器は第1・第3号住居跡の堆積土と、堆積層（基本層位第I-VI層）から出土している。いずれも破片のため、器形・文様の単位が把握できるものはない。そのうち文様をもつものは文様表現の技法によって大まかに次のような種類に分けることができる。

a：降線や沈線あるいは両者が組み合って区画文様を表現するものである。多くは磨消縄文を伴い刺突の加えられるものもある。本遺跡出土の縄文土器の大半を占める。類例は上深沢遺跡（宮城委：1978）、青島貝塚（後藤：1968）、湯坪遺跡（宮城委：1978）などにみられ、中期後半のものと考えられる。

b：貼瘤のみられるものである。金剛寺貝塚（後藤：1960）などに類例がみられ、金剛寺式と思われる。

他に文のみが施されるものや、無文のものがある。これらは文様をもつものに中期後半の土器が量縄的に多くみられることから同時期のものであろう。

〔弥生土器〕

弥生土器は第1・3号住居跡の堆積土とグリッド内の堆積土から出土している。これらの土器は口縁部・体部・底部の破片があるが、いずれも小破片のため時期を限定することができない。

〔土師器・須恵器〕

〈土師器〉

住居跡・土壙・グリッド内から出土している。完形品と図上復元できたものを分類に用いた。

坏：坏は製作にすべてロクロを使用している。切り離し技法、器面調整の特徴から次のように分類される。

I類：切り離しがヘラ切り技法によるものである。体部下端に回転ヘラケズリが加えられている。

II類：切り離しが回転糸切り技法によるものである。体部下端に手持ちヘラケズリが加えられている。

III類：再調整のため切り離しが不明なものである。再調整は1：体部下端から底部あるいは底部に手持ちヘラケズリ、2：体部下端から底部に回転ヘラケズリの加えられているものに分かれ る。

甕：甕は製作に際し、ロクロを使用していないもの（A類）とロクロを使用しているもの（B類）とがある。B類では口縁端部がわずかに上方につまみ出されるものと口縁端部が角ばるものとがある。

（須恵器）

須恵器は住居跡、土壙、グリッド内から出土している。須恵器を分類すると次の種類に分けられる。

坏：坏は切り離し技法と器面調整から次のように細分できる。

I類：回転ヘラ切り技法のものである。再調整はみられない。

II類：回転糸切り技法のものである。再調整の加えられるもの（IIa）と再調整のみられないものの（IIb）とがある。IIaの再調整には1：体部下端から底部あるいは体部下端に手持ちヘラケズリの施されるもの、2：体部下端に回転ヘラケズリの施されているものとがある。

甕：甕は堆積層から出土している。頸部から口縁部にかけて外反し、口頸部に波状文をもつものや頸部でくびれ、口縁部は外反し、口縁端が上方につまみだされるものなどがある。

（組み合わせと年代）

土師器には坏・甕があり、製作にはロクロを使用している。坏は3種類、甕は2種類に細分できた。これらの出土状況をみると下記の表のようになる。

	土 師 器 坏	須 恵 器 坏
第 1 号 住 居 跡		II a(1)
第 2 号 住 居 跡	III(2)	
第 3 号 住 居 跡	III(1)	II b

住居跡・第2土壙は組み合わせから、坏は製作にすべてロクロを使用したものである。

土師器の年代

東北他方の南部における土師器の編年は氏家和典氏によって主に坏形土器を中心に研究がなされている。その後も同氏の研究および阿部義平氏、岡田茂弘氏、工藤雅樹氏、桑原滋郎氏、小笠原好彦氏などの研究によって検討が加えられている。それによると出土土器の年代は次のようになる。

坏：坏はすべてロクロを使用していることから、表杉ノ入式期（氏家：1957）に属するものと考えられる。

甕：甕は仙台市岩切鴻ノ巣遺跡の第I群土器に類似しており、他の土器との組み合わせ関係は成立しないものの、塩釜式とされている。本遺跡の場合も有段口縁という特徴から塩釜式に属するものとしておきたい。

甕：ロクロ使用の甕は時期を限定することができない。ロクロ使用の甕は表杉の入式に属す

るものと考えられる。

以上のことから土師器壺は塗釜式（古墳時代前期）に、壺・甕B類は表杉ノ入式（平安時代）に属するものと考えられる。

須恵器は壺が2種類、甕が2種類にわけられた。

東北南部における須恵器の編年は近年になって窯跡出土の遺物を中心になされてきている。また官衙跡等の瓦類との共伴関係や技法上からも研究が進められているが、まだ確立されたものとはなっていない。本遺跡出土の須恵器も出土量が少なく、共伴関係を検討できるような状態のものもなく不明な点が多い。よって年代の位置づけを概略的にのべると次のようになる。

壺：壺B類は住居跡、第2土壤での出土状態から、平安時代に属するものと考えられる。

甕：甕は高清水町五輪C遺跡の出土土器に類似しているところから平安時代に属するものと考えられる。

また壺A類、蓋など平安時代より古い時期に属する可能性をもつものもある壺・鉢について器形など不明な点が多く、出土例も少なく時期は不明である。

[土師質土器]

土師質土器は堆積層が出土している。

皿：皿は底部から口縁部にかけて直線的に短かく外傾するものとややまるみをもって立ち上がるものがある。

現在類例が少く、時期を限定することができない。

[中世陶器]

グリッド内から出土しており、器種には甕・壺・鉢がある。

甕は頸部が比較的短く「ハ」の字形に未広がりになり、口縁部は「N」字状になっている。さらに口縁部は幅のせまい口縁帯をもち、受口状口縁である。口縁部の器面調整は外面で横ナデ調整、内面で口頸部に横ナデ調整である。体部では外面に横ナデ・ケズリの調整が加えられており、内面で横ナデ・粗いナデツケ調整が加えられている。

壺は頸部で直立ぎみに立ち上がり、口縁部は外反し、受口状口縁となる。口縁部の器面調整は外面は不明であり、内面は横ナデ調整が加えられている。体部では外面にヘラケズリ、内面に粗いナデ調整がみられる。

鉢（擂鉢）：鉢は体部から口縁部にかけてやや内湾している。口縁端は比較的平坦で、やや角ばった感じの口縁部となる。器面調整は内外面とも丁寧な横ナデ調整であり、回転台を利用したと思われる。内面には筋目はない。擂鉢と考えられ、本来は口縁部に片口がつくと考えられる。

以上の中世陶器については、藤沼邦彦氏によれば壺は口縁の形態・色調・胎土などから白石

市東北窯跡から出土した壺に類似しており、東北窯跡の生産品と考え年代を13・14世紀のものと位置づけ、甕については他からの移入品で壺と同じ時代に使用されたと考えられている。(藤沼:1976・1977)

2. 壇穴住居跡

年代

今回の調査で3軒の住居跡を確認した。第1号住居跡・第3号住居跡から伴出した土師器・須恵器は形態技法の特徴から平安時代に属するものと考えられる。第2号住居跡は伴出遺物がなく、明確な年代は不明であるが、住居の構造から古代に含まれるものと考えられる。

形態と構造

本遺跡から検出された住居跡について、平面形・規模・床面・柱穴・周溝・カマドなどについてふれてみたい。

平面形は3軒ともほぼ方形を基調としている。床面の構築方法をみると地山を床としているものの、貼床をしているものがある。しかし、第2号住居跡は不明である。周溝は2軒ともみられる。カマドは2軒とも付設されており、いずれも壁にとりつけられているもので煙道が認められる。カマドの位置は北壁にあり、燃焼部の構築方法は石組みによるものである。

3. その他の遺構

(1) 掘立柱建物跡

いざれも建物跡の確認面は地山面である。時代を決定する遺物は出土していないが、柱が基本層位第IV層途中までの高さで残存しており、第IV層の遺物で最も新しい時期のものが中世陶器であることから、中世または、それ以降にくだる可能性もある。

(2) ピット群

発掘区中央部の北側のピット群と掘立柱建物跡周辺のピット群がある。これらのピットは、時期・性格については不明である。

(3) 土壙

第1土壙は年代・性格とも不明である。第2土壙は平安時代の土師器・須恵器が出土しており、平安時代のものである。完形品が出土している点、形態的に住居跡の貯蔵穴状ピットに類似している。

(4) 焼土遺構

長方形のものと梢円形のものがある。いざれも壁面が焼けて赤変しており、土壙の中で火を使用したことを見ている。

このような遺構は金成町佐野遺跡・宮前遺跡・泉市宮下遺跡など県内各地に類例がみられるが、その性格や年代については明らかにされていない。しかし、第1焼土遺構は堆積土から焼けた人骨片が出土していることから火葬の施設と考えられる。類例に白石市谷津川遺跡がある。

そのほかの焼土遺構については具体的な性格を検討できる資料が得られなかった。

(5) 焼面

長方形のものと円形のものがある。長方形のものは焼土遺構に類似している。円形のものの中央部にはピット状凹があり、焼土が入り込んでいる。出土遺物はなく、年代・性格とも不明である。

(6) 石組炉

ピットを掘り込み中央に丸い軽灰岩の石をおき、周縁に小さな河原石を配したものである。中央部の軽灰岩は火の使用により焼けている。年代・性格とも不明である。

(7) 墓壙

出土遺物は寛永通宝錢と歯数本が出土していることから、近世以後の墓壙と考えられる。

(8) 溝

第1号住居跡を削平してつくられている。しかし、溝の年代を限定できる資料はなく、また溝の性格は不明である。

V ま と め

葉坂戸の内遺跡は音見坂地区の北西から東南方向にのびる小起伏丘陵の比較的ゆるやかな斜面に立地する。

縄文時代

葉坂戸の内遺跡のもっとも古い遺跡としては「大木8b～9式」の土器、石器が出土している。また、後期・晚期の土器も出土している。縄文時代の遺構は確認できなかったが、縄文時代に本遺跡において人々の活動が何らかの形で開始されたものと考えられる。

弥生時代

弥生時代の遺物としては、わずかではあるが土器・破片が出土している。これらの時期の遺構などは確認できなかったが、石包丁の出土などから稲作農耕を行なっていたことをうかがわせる。

古墳時代

古墳時代の遺物としては、わずかではあるが土器・破片が出土している。土器は古墳時代前期（塩釜式）の土器が出土している。これらの時期の遺構などは検出できなかったが、本遺跡において古墳時代の人々が生活していたことをうかがわせる。

平安時代

平安時代の堅穴住居跡2軒・遺物が発見された。いずれも遺跡の南斜面から平坦になる畑地で確認された。これらの住居跡はカマドを伴っており石組により構築されている。

中世～近世

中世の遺物としては青磁小皿破片・中世陶器が出土している。中世陶器は日常雑器である甕壺・鉢である鎌倉時代中・後葉と考えられる。白石市東北窯出土の壺が類似していることから生産地と消費地との結びつきがうかがわれる。また2棟の掘立柱建物跡もこの時代以後との関連からしても生活の場としていたことをうかがわせる。

また、近世のものとしては陶器類・泥面子が出土しており、生活との密接な関連をもつていたことが考えられる。

〈引用参考文献〉

- 阿部義平 (1968) : 「東国の土師器と須恵器～多賀城外の出土土器をめぐって」帝塚山考古学No1
- 伊東信雄 (1957) : 「古代」宮城県史
- 一条孝夫 (1978) : 「湯坪遺跡発掘調査概報」宮城県文化財調査報告書第54集
- 一条孝夫 (1979) : 「高畠遺跡発掘調査概報」丸森町文化財調査報告書第1集
- 氏家和典 (1974) : 「東北土師器の型式分類とその編年」歴史第14輯
- 岡田茂弘・桑原道郎 (1974) : 「多賀城周辺における古代土器の変遷」宮城県多賀古跡調査研究記要 I
- 小笠原好彦 (1976) : 「東北における平安時代の土器についての2・3の問題」東北考古学の諸問題
- 太田昭夫 (1979) : 「中平遺跡」宮城県文化財発掘調査概報(昭和53年度分) 宮城県文化財調査報告書第57集
- 小野寺洋一郎 (1979) : 「五輪C遺跡」宮城県文化財調査報告書第61集
- 加藤 孝 (1951) : 「塙釜市杉ノ貝塚の研究」宮城学院女子大学研究論文集V
- 加藤道男 (1972) : 「塙田前遺跡」東北自動車道関係遺跡発掘調査概報(白石市・柴田郡村田町地区) 宮城県文化財調査報告書第25集
- 角田市教育委員会 (1997) : 「柴田郡遺跡」角田市文化財調査報告書第1集
- 工藤雅樹・桑原道郎 (1972) : 「東北地方における古代土器生産の展開」考古学雑誌第57巻3号
- 桑原道郎 (1970) : 「ロクロ土器跡解説について」歴史第38輯
- 小井川和夫・手塚均 (1978) : 「勝原遺跡」宮城県文化財調査報告書第53集
- 後藤勝彦 (1960) : 「宮城県名取市高館金剛寺貝塚出土埴輪式土器の研究」宮城県の地理と歴史第2輯
- 後藤勝彦・他 (1975) : 「青島貝塚」南方町史(資料編)
- 小牛田町教育委員会 (1976) : 「山前遺跡」
- 斎藤吉弘・真山悟 (1978) : 「北沢遺跡」宮城県文化財調査報告書第56集
- 志間泰治 (1971) : 「鰐沼遺跡」宮城県教育委員会東北電力株式会社
- 志間泰治 (1974) : 「柴田町の文化財一遺跡と遺物一」柴田町の文化財第5集 柴田町教育委員会
- 白鳥良一 (1972) : 「明神駒遺跡」東北自動車道関係遺跡発掘調査概報(白石市・柴田郡村田町地区) 宮城県文化財調査報告書 第25集
- 白鳥良一・加藤道男 (1974) : 「岩切鷺ノ巣遺跡」東北新幹線関係遺跡調査報告書 I 宮城県文化財調査報告書 第35集
- 芹沢長介 (1960) : 「石器時代の日本」
- 田中則和 (1973) : 「宮下遺跡」東北自動車道関係遺跡発掘調査略報 宮城県文化財調査報告書 第31集
- 手塚 均 (1980) : 「佐野遺跡」東北自動車道関係遺跡発掘調査報告 宮城県文化財調査報告書 第63集
- 橋崎彰一 (1974) : 「須恵器・三彩・絵袖・灰釉」日本の陶磁一古代中世編I
 (1975) : 「瀬戸・常滑・渥美」 " " 2
 (1974) : 「越前・珠洲・信楽・備前・丹波」 " " 2
- 丹羽茂・三浦圭介・加藤貞子 (1973) : 「普生田遺跡調査概報」宮城県文化財報告書第29集
- 丹羽茂・柳田俊雄・阿部 恵 (1974) : 「西塙田遺跡」東北新幹線関係遺跡調査報告書 I 宮城県文化財調査報告書第35集
- 藤沼邦彦 (1971) : 「大橋遺跡」東北自動車道関係遺跡調査概報(刈田郡藤野町地区) 宮城県文化財調査報告書 第24集
 (1975) : 「宮城県地方の中世陶器墓跡(予稿)」東北歴史資料館研究紀要 第2巻
 (1977) : 「宮城県出土の中世陶器について」東北歴史資料館研究紀要 第3巻
- 宮城県教育委員会 (1975) : 「宮前遺跡」宮城県文化財調査報告書 第38集
 (1977) : 「船越前遺跡」宮城県文化財調査報告書 第49集
 (1978) : 「上溪尺遺跡」宮城県文化財調査報告書 第52集
- 森 貢喜 (1980) : 「谷津川遺跡」東北新幹線関係遺跡発掘調査報告書宮城県文化財調査報告書第62集
- 山内清男 (1964) : 「日本原始美術」 I

土壤樣片統計表